
剣の世界の銃使い

疾輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣の世界の銃使い

【Nコード】

N2655V

【作者名】

疾輝

【あらすじ】

この小説はソードアートオンラインの2次創作です。

原作にオリ主を入れた小説で、基本的に原作を乗っ取ります。

主人公は強めに設定されているので、チートっぽくなるかもしれません、そこはご了承ください。

やっぱ、最初はプロローグからだよね

無限の蒼穹に浮かぶ巨大な石と鉄の城。それがこの世界のすべてだ。職人クラスの酔狂な一団がひと月がかりで測量したところ、基部フロアの直径はおよそ十キロメートル、その上に無慮百に及ぶ階層が積み重なっているというのだから、茫漠とした広大さは想像を絶する。総データ量などとても推し量ることが出来ない。

内部にはいくつかの都市と多くの小規模の街や村、森と草原、湖までが存在する。上下のフロアを繋ぐ階段は各層に一つのみ、そのすべてが怪物のうろつく危険な迷宮区画に存在するため発見も踏破も困難だが、一度誰かが突破して上層の都市に辿り着けばそこ下層の各都市の《転移門》が連結されるため誰もが自由に移動できるようになる。

そのようにしてこの巨城は、二年の長きに渡ってゆつくりと攻略されてきた。現在の最前線は第七十四層。

城の名は《アインクラッド》。約六千もの人間を飲み込んで浮かび続ける剣と戦闘の世界。

またの名を――

《ソードアート・オンライン》。

「おっ、いたいた・」

俺はお目当てのモンスターを発見した。100メートル以上離れた先に、一匹のモンスターが佇んでいる。

モンスターの名前はブルーサラマンダー。このエリアではレベルも

高く、滅多に出現しないモンスターだ。そのため、奴から出るアイテムや素材は貴重でプレイヤーたちから重宝がられていた。しかし、逃げ足が早いため、エンカウントできる可能性はかなり低い。簡単に言くと、素材版のはぐれメタルだ。

見つけたはいいが、このまま正面から突っ込んで行っても、逃げられるだけだろう。

だが、俺には奴に気づかれず一撃で倒すことができる。

周りを見渡して、周囲に他のプレイヤーがいないことを確認してから、右手を振りメニューウィンドウを呼び出す。

アイテムリストから、一つを選んで装備フィギュアにスクロールする。そして、スキルウィンドウを開き、武器スキルを変更。

ここまで操作したところで、腕に新たな重みが加わる。

まず、目に付くのは燃える様な紅。くれない紅をを基調とした色合いで、黒や白で細部が色付けされている……

《銃》だ。

銘は《クリムゾンフレア》、銃の中でも大型のスナイパーライフル。《剣がプレイヤーを象徴する世界》を完全に壊す、俺のユニークスキルだ。

出現の条件がはっきり判明していない武器スキル、ランダム条件ではとさえ言われている、それが《エクストラスキル》と呼ばれるものだ。さらに、十数種類知られているエクストラスキルのほとんどは最低でも十人以上が習得に成功しているが、習得者が一人しかいないエクストラスキルを《ユニークスキル》という。

今まで発見されて世間に広まっているユニークスキルは、とある有名な《神聖剣》だけだ。

銃を構え、取り付けてあるスコープを覗く。狙いは頭、照準を頭に合わせると引き金を引く。

ズドン

銃声が鳴り響き、弾は寸分変わらずブルーサラマンダーの頭に吸い込まれていく。

ドスッ

弾が狙いどおり命中し、2度目の音が鳴る。その瞬間、ガラス塊を割り砕くような大音響と共に、微細なポリゴンの欠片となって爆散した。

完全に消滅したのを確認し、もう一度左手を振る。アイテムリストに素材が入っているのを見てから、銃を仕舞う。
できるだけ銃は隠しておきたい。下手にプレイヤーどもに見つかって騒がれたら堪ったもんじゃないからな。

「さてと、帰りますかね・・・」

そう言つて、転移門に向つて歩き始めた。
全てはあの時始まった・・・

やっぱ、最初はプロローグからだよね（後書き）

どうも、疾輝です。

まだまだ未熟ですが、これからよろしくお願いします。

あと、小説内に銃が出てきますが、作者は余り銃について詳しくないので、そのところは目を瞑ってもらえるとありがたいです。

誤字・脱字、感想・アドバイス等何かありましたらよろしくお願いします。

人物紹介（前書き）

今回は人物紹介です。
とりあえずどうぞ！

人物紹介

プレイヤー名：レイト

スキル構成：銃火器、短剣、投剣、武器製造など

説明

黒髪で整った顔立ちの少年。ひよんな事からユニークスキル、《銃火器》を手に入れる。主武器は銃を使うが、他のプレイヤーに見せるのを嫌っているため普段は短剣を使っている。

攻略組の一人ではあるが、ギルドに入らずソロで活動している。また、“楽しむ”事を重要視してるため、そこまで攻略に熱心ではない。

ちなみに使っている銃は全て自作。

《藍椿》のメンバーの一人で、パーティ内では作戦参謀の役割をしていた。

プレイヤー名：セレーナ

スキル構成：槍、体術、防具作成など

説明

小柄な、水色のロングヘアの少女。皆からはレナと呼ばれている。《藍椿》のメンバーで、後方支援担当。戦闘時に限らず、アイテムの使い方が非常にうまく、藍椿でも何度もメンバーを支えてきた。もともと彼女は商人であり、今は自分の店を持っている。

レイトのことを先輩と呼び、慕っている。

人物紹介（後書き）

今日はもう1話投稿しますので、是非読んでください。
誤字・脱字、感想・アドバイス等何かありましたらよろしく願い
します。

11月29日、セレーナを追加しました。

ここまで楽しいゲームだった（前書き）

3話目です。

では、どうぞ！

ここまで楽しいゲームだった

「ほんとと、完成度高いよなあ」

ここは第一層の主街区、始まりの町。

ファンタジーゲームの代名詞でお馴染み、中世ヨーロッパ風のレンガと木で造られた建築物が大通りから裏通りの細い路地まで軒を連ね、裏路地や店の中まで細かく作られている。

今も目の前では沢山のプレイヤーが行きかっている。今日から正式サービスが開始された《ソードアートオンライン》だったが、さすが期待のVRMMO、ログインしている人の数は半端ない。

「こうやって見ると現実と変わらないよな」

手の感覚、話すときの表情、足の裏に伝わる石の感触。どれをとっても現実で感じているものと変わらない。唯一、今始まりの町にかかっているBGMと見上げた時に見える上の層がここが現実世界ではないということを示している。

それも、アーガス社が開発した、「ナーヴギア」と言うヘッドギアをつけることで「フルダイブ」と呼ばれる状態に入ったプレイヤーは、現実世界の自分の肉体から抜け出し、この世界での肉体を持つことになる。簡単に言うと、現実の世界で自分の脳から身体へと送り出された電気信号がナーヴギアによって脊髄に伝わる前に延髄でデジタル信号に変えられて、現実の身体の代わりにこの世界での自分の身体を動かすのだ。そのため、現実世界の体はベットの上で寝たきりになっている。

「さてと、一回現実リアルに戻りますか」

ほとんどのプレイヤーが、ログインしてすぐにフィールドに向い、“自分の体”でのモンスターとの戦闘を楽しむに行ったが、レイトはまず街を探索してみようと始まりの街に残り、店の場所から細い裏路地まで街の全てを歩き回った。そして、一通り終わったので一度ログアウトしようかと思ったのだが・・・

「？、ログアウトボタンが無い？」

ウィンドウを開き、一番下の《LOG OUT》、つまりこの世界からの離脱を行うためのボタンがあった、はずだった。位置を間違えたのかと思い、もう一度ウィンドウの隅から隅まで探したが、やはり見当たらない。

早速運営側がミスしたななどと考えつつ、初めてログインしたときに来る中央広場に向ってみた。すると、次々とプレイヤーたちが青い光の柱に包まれて転送されてくる。ここまで統制が取れてプレイヤーたちが転移してくるわけが無いので、運営側の強制転移ということになる。

近づいてみると、どうやら皆同じ事を考えていたらしく、「これでログアウトできるのか」や「とつとここから出してくれ」などと口々に言っている。その間にも転送してくるプレイヤーは増え続ける。

次第にプレイヤーたちはだんだん奇立ってきたようで、「ふざけんな」だの「さつさとしろ」だのと言った暴力的な言葉も出始めた。と、転送されてくるプレイヤーがいなくなる。つまり、全てのプレイヤーが今この中央広場に集まったというわけだ。

そして唐突に誰かが「あっ・・・上を見る！」と言った事で、皆が上を向き、広場は静かになった。

【Warning】

【System Announcement】

俺達の頭上には真っ赤なフォントでそんな文字が表示されていた。システムを管理する運営側からのアナウンスが始まることを示している。皆がこれで戻れると、そう思った。

そしてそんな皆の予想は、綺麗に裏切られることになる。全面的に悪い意味で。

《ソードアートオンライン》が楽しい非現実^{ゲーム}だったのはこのときまでだった。

ここまで楽しいゲームだった（後書き）

次回から長い長い説明会に入ります。

多分3話くらい使うと思うので・・・

感想とか待ってます！！

作成者からの説明会（前書き）

無理やり茅場さんの説明会を1つにまとめて見ました。
原作読んでない方には分かりにくいかもしれませんが。
ではどうぞ！

作成者からの説明会

真っ赤なフォントで文字が表示された後、身長20メートルあるうかという、真紅のローブを纏った顔無しの人の姿が突如出現した。そして、低く、良く通る男の声が、頭上から降り注いだ。

『プレイヤーの諸君、私の世界へようこそ』

は？私の世界だと・・・？

俺はローブがいった事が理解できなかった。運営側ならまず説明があるだろうし、それにあんたは誰なんだ？そんな俺の疑問はすぐに消え去る。

『私の名前は茅場晶彦。今やこの世界をコントロールできる唯一の人間だ』

なっ・・・茅場だと・・・

天才ゲームデザイナーで量子物理学者にしてナーヴギアの基礎設計者、それが茅場晶彦。そもそもこのSAOは実質茅場が作った物であり、さらに彼は極力人前に出ることを嫌っていたはずだ。

『プレイヤー諸君は、すでにメインメニューからログアウトボタンが消滅していることに気付いていると思う。しかしゲームの不具合ではない。繰り返す。これは不具合ではなく、《ソードアート・オンライン》本来の仕様である』

仕様？仕様って何のことだよ・・・

俺の思考が理解する前に再び茅場の声が響く。

『諸君は今後、この城の頂を極めるまで、ゲームから自発的にログアウトすることはできない』

『・・・また、外部の人間の手による、ナーヴギアの停止あるいは解除も有り得ない。もしそれが試みられた場合――』

ここでわずかな間が開き、そして。

『――ナーヴギアの信号素子が発する高出力マイクロウェーブが、諸君の脳を破壊し、生命活動を停止させる』

生命活動の停止？つまりそれは・・・死ぬってことか・・・？その時、俺はナーヴギアの構造を思い出した。あれには大容量のバッテリーが内部に埋め込んであり、その出力があれば人間の脳を焼き尽くす事が可能だ。

つまり、茅場の言っている事は現実だという事。

その後もアナウンスは続いていたが、俺の頭には入ってこなかった。

ログアウトは不可能、無理やり外しても死亡。そして、現実で死んだかどうかはこちらからは確認不可。

そこまで確認した所でアナウンスがまた頭に入ってくる。

『しかし、充分に留意してもらいたい。諸君にとって《ソードアト・オンライン》は、既にただのゲームではない。もう一つの現実と言すべき存在だ。……今後、ゲームにおいて、あらゆる蘇生手段は機能しない。ヒットポイントがゼロになった瞬間、諸君のアバターは永久に消滅し、同時に』

次に何を言ってくるのか、俺にはもう分かっていた。

『諸君らの脳は、ナーヴギアによって破壊される』

分かってはいたが、聞きたくは無かった。

『諸君がゲームから解放される条件は、たった一つ。先に述べたとおり、アインクラッドの最上部、第百層まで辿り着き、そこに待つ最終ボスを倒してゲームをクリアすればよい。その瞬間、生き残ったプレイヤー全員が安全にログアウトされることを保証しよう』

逆に言えば、それまではゲーム内で死亡しない限りログアウトはできない。もちろん、その場合の結末も分かっていたが。

『それでは、最後に、諸君にとってこの世界が唯一の現実であるという証拠を見せよう。諸君のアイテムストレージに、私からのプレゼントが用意してある。確認してくれ給え』

すぐにメニューウィンドウを開く。そのプレゼントとやらは所持品リストの一番上にあった。

表示されていたアイテム名は、「手鏡」

すぐさまタップし、オブジェクト化させる。その名の通り手鏡が出てきた。

突然、周りに居るプレイヤーの顔が白い光に包まれ、俺の視界も同じようにホワイต์アウトする。

視界がもどるとそこには、先程とは違う容姿、それも現実世界にいるような顔のプレイヤーたちが立っていた。ん？現実……？俺は茅場のしたことを理解した。つまり、ナーヴギアの信号素子によるスキヤニングなどを使って、現実世界の顔や身体を再現したのだろう。俺も確認したが自分の顔になっている。

これで、もうSAOが現実であると認識せざるを得なくなった。しかし、まだ疑問は残る。

「なぜ、こんなことをする？」

俺の呟きを聞きとめたかのように、茅場の声が降り注いだ。

『諸君は今、なぜ、と思っっているだろう。何故私は——S A O及びナーヴギア開発者の茅場晶彦はこんなことをしたのか？これは大規模なテロなのか？あるいは身代金目的の誘拐事件なのか？と』

違う——テロならば、こんなゲームばかり閉じ込める必要も無い。身代金もこんな回りくどいやり方をしなくても、もっと効率的にする事だって可能だ。何が目的だ………

『私の目的は、そのどちらでもない。それどころか、今の私は、既に一切の目的も、理由も持たない。なぜなら……この状況こそが、私にとっての最終的な目標だからだ。この世界を作り出し、”観賞”するためにのみ私はナーヴギアを、S A Oを造った。そして今、全ては達成せしめられた』

一呼吸おいて、また声が響く。

『……以上で ソードアート・オンライン 正式サービスのチュートリアルを終了する。プレイヤー諸君の——健闘を祈る』

その言葉をいい終えた瞬間、赤ローブの姿がシステムメッセージの中に溶け込んでいき、出てきたときと同じように消滅した。

遠くから始まりの街のB G Mが聞こえてくる。そして、やっと今の状況を理解したプレイヤー集団が然るべき反応を見せた。

「嘘だろ……なんだよこれ、嘘だろ！」

「ふざけるなよ！出せ！ここから出せよ！」

「こんなの困る！この後約束があるのよ！」

「嫌ああ！帰して！帰してよおおお！」

悲鳴。怒号。絶叫。罵声。懇願。そして咆哮。

互いを罵り合ったり、その場に倒れる者もいた。当然だろう。たった数十分でゲームプレイヤーから囚人に変えられてしまったのだから。

しかし、俺は落ち着いていた。多分、他のもの達よりすんなり、この状況を受け入れてしまった所為だろう。

俺の思考は通常と変わらぬ程度に戻っており、これから如何すればいいのか、それを考え始めていた。

まず、この世界でも絶対に死んではいけない。そして、100層までこの城を攻略しなくては現実世界に戻れない。つまり、死なないで100層まで攻略すれば現実世界に戻れるということだ。

それは実現するのは、とてつもなく難しい。そして、仮にできたとしても膨大な時間がかかるだろう。

それでも、今の俺にはいつのまにか、やってやるという意思ができていた。そして、これに参加してしまった以上いくら過酷なデスゲームだろうとも絶対楽しんでやろうとも。

「絶対生き残ってやるさ」

こうして、SAOというゲームはルールは大幅に変わったものの、再び幕を開けたのだった。

作成者からの説明会（後書き）

どうだったでしょうか？

一巻のところから始めようか、黒の剣士のところから始めようか迷っています。

感想とか待ってます！！

4つのグループ（前書き）

今回はほとんど原作丸写しです。

下手に変えると訳が分からなくなるので・・・
では、どうぞ！

4つのグループ

ゲーム開始一ヶ月で二千人が死んだ。

俺が見たとおり、この世界から出られないと知ったときの皆のパニックは狂乱の一言に尽きた。わめく者、泣き出す者、中にはゲーム世界を破壊すると言って街の石畳を掘り返そうとする者までいた。無論街はすべて破壊不能オブジェクトで、その試みは徒労に終わったのだが。どうにか皆が現状を呑み込み、それぞれに今後の方針を考え始めるまでに数日を要したと聞く。

プレイヤーは、当初大きく四つのグループに分かれた。

まず、これが約半分を占めたのだが、茅場の出した解放条件を信じずに外部からの救助を待った者たちだ。

気持ちは痛いほどよくわかった。自分の肉体は、現実には椅子やベツドの上でゆったりと横たわり、呼吸している。それが本当の自分であり、この状況は 仮 のもので、ささいなきっかけで向こうに戻れるはずだ。確かにメニューからログアウトはできないが、内部で何か見落としたことに気付けば――。

あるいは、外部では今、運営企業アーガスと、何より政府がプレイヤーを救おうと最大限の努力をしているだろう。慌てずに待っていればある日ふと自分の部屋に戻り、家族と感動の対面を果し、学校や職場で一時の話題をさらう。

そう思うのも本当に無理はなかった。俺も自身内心の何割かではそう期待していたのだ。彼らの取った行動は基本的に 待機 。街からは一步も出ず、初期配布されたゲーム内通貨を僅かずつ使って日々の食糧を買い求め、安い宿屋で寝泊りし、何人かのグループを作って漠然と日々を過ごしていた。

幸いはいじまりの街は基部フロアの面積の約二割を占め、東京の小さ

な区ひとつほどの威容を誇っていたため五千人のプレイヤーがそれほど窮屈な思いをせず暮らせるだけのキャパシティがあった。

だが、助けの手はいつまで待っても届かなかった。何度目覚めても最初に目にする光景は、常に青空ではなく陰鬱な色彩の天空の蓋だった。初期資金も永遠に保つわけもなく、やがて彼らも何らかの行動を起こさざるを得なくなった。

二つ目のグループは全体の約三割。三千人ほどのプレイヤーが属したのが、協力して前向きにゲームクリアを目指そうという集団だった。リーダーとなったのは、日本国内でも最大級のネットゲーム情報サイトの管理者だった男だ。

彼のもと、プレイヤーはいくつかの集団にわけられて、獲得したアイテム等を共同管理し、情報を集め、上層への階段がある迷宮区の攻略に乗り出した。リーダーのグループははじまりの街の、中央広場に面した 黒鉄宮 を占拠し、物資を蓄積してあれやこれやと配下のプレイヤー集団に指示を飛ばしていた。

この巨大集団にはしばらく名は無かったが、全員に共通の制服が支給されるようになってからは、誰が呼び始めたか《軍》という笑えない呼称が与えられた。

三つ目は、これは推定で千人ほどが属したのだが、初期に無計画な浪費でコルを使い果たし、さりとてモンスターと戦ってまっとうに稼ぐ気も起こさず、食い詰めた者達だ。

ちなみに、データの仮想世界であるSAO内部でも厳然と起こる生理的欲求が二つある。睡眠欲と食欲だ。

睡眠欲は、これは存在するのも納得が行く。脳は与えられている外界情報が現実世界のものなのか仮想世界のものかななどということとは意識していないだろうから。プレイヤーは眠くなれば街の宿屋へ行き、懐具合に応じた部屋を借りてベッドに潜り込むことになる。莫大なコルを稼げば、好みの街で自分専用の部屋を買うこともでき

るが、おいそれと貯まる額ではない。

食欲に関しては、多くのプレイヤーを不思議がらせた。現実の肉体が置かれた状況など想像したくもないが、恐らく何らかの手段で強制的に栄養を与えられているのだろう。つまり、空腹感を感じてこちらで食事をしたとしても、それで現実の肉体の胃に食い物が入るわけではない。

だが、実際にはゲーム内で物を食うと空腹感は消滅し、満腹感が発生する。このへんのメカニズムはもう脳の専門家にでも聞いてもらうしかない。

逆に言えば、一度感じた空腹感は食わないかぎり消えることはない。多分、食わなくても死ぬことはないのだろうと思う。しかしやはりそれが耐えがたい欲求であることに变りは無く、我々は毎日NPCが経営するレストランに突撃してはデータの食い物を胃に詰め込むことになる。蛇足だがゲーム内で排泄は必要ない。現実世界でのことは、食う方面よりも更に考えたくない。現実世界でのことは、話を戻すと――。

初期に金を使い果たして、寝るはともかく食うに困ったもの達のうち大半は、例の共同攻略グループこと《軍》にいやおうなく参加することになった。上の指示に従っていれば少なくとも食い物は支給されたからだ。

だが、どこの世界にも協調性など薬にしたくもないという人々が存在する。はなからグループに属するのをよしとしなかった、あるいは問題を起こして放逐された者達は、はじまりの街のスラム地区を根城にして強盗に手を染めるようになった。

街の中そのものはシステム的に保護されており、プレイヤーは他のプレイヤーに一切危害を加えることはできない。だが街の外はその限りではない。はぐれ者たちははぐれ者たちで徒党を組み、モンスターよりもある意味旨みがあり、危険の少ない獲物であるプレイヤーを街の外のフィールドや迷宮区で待ち伏せして襲うようになったのだ。

とはいえさすがの彼らも 殺し まではしなかった——少なくとも最初の一年は。このグループはじわじわと増加し、ゲーム開始一ヶ月で先に述べたとおり一千人に達したと推定されていた。

最後に、四つ目のグループは簡単に言ってその他の者たちだ。

攻略を目指すとしても巨大グループには属さなかったプレイヤーたちの作った ギルド がおよそ五十、人数にして五百。オレたちも含めギルド所属者たちは軍にはないフットワークの良さを活かして堅実な攻略と戦力増強を行っていた。

更に、ごく少数の職人、商人クラスを選択した者たち。せいぜい二、三百人程度の数だったが、彼らもまた独自のギルドを組織して、当面の生活に必要なコルを稼ぐためスキルの修行を開始した。

のこる百人たらずが、俺もここに入るが ソロプレイヤー と呼ばれた者達だ。グループに属さず、単独での行動が自己の強化、ひいては生き残りにもっとも有効であると判断した利己主義者たち。そのほとんどがベータテスト経験者だった。まあ、俺は違ったが。知識を生かしたスタートダッシュによって短期間でレベルを上げ、単独でモンスターや強盗たちに対抗する力を得てしまった後は、正直に言って他のプレイヤーと共闘するメリットはほとんどなかったのだ。

その上、SAOというゲームは、魔法、つまり 必中の遠距離攻撃 が存在しないゆえに単身で複数のモンスターの相手をし易いという特徴がある。しっかりした技術さえあれば、ソロプレイのほうで経験値効率ではパーティープレイを上回る。

貴重な知識を独占し、猛烈なスピードでレベルアップしてゆくソロプレイヤーとそれ以外の者達との間には深刻な確執が発生していた。ゲームがある程度落ち着いてからは、ソロプレイヤーは皆はじまりの街を出て、より上層の街を根城にするようになっていった。

黒鉄宮の、もとは 蘇生者の間 であつたところには、ベータテス

トの時には存在しなかった金属製の巨大な碑が設置され、その表面には一万人のプレイヤー全ての名前が刻印されていた。なんとも有難い配慮で、死亡した者の名の上にはわかりやすく横線が刻まれ、横に詳細な死亡時刻と場所、死亡原因が記されるというシステムだ。さて、軍 やそれ以外の集団に属したプレイヤー、特に待機組に属した者たちが遅まきながらゲームの攻略を開始するにつれて、やはりモンスターとの戦闘で命を落とす者も現れはじめた。

SAOでの戦闘には、多少の勘と慣れが必要となる。自分で無理に動こうとせずシステムのサポートに 乗っかる のがコツと言えるだろうか。

例えば、単純な片手剣上段斬りでも、片手直剣スキル を習得して剣技リストに 上段斬り を備えた者が、その技をイメージしながら初期モーションを起こせば後はシステムがほぼオートでプレイヤーの身体を動かしてくれるのに対し、スキルの無い者が無理やり動きを真似ようとしても振りは遅いわ攻撃力は低いわでおおよそ実戦で使えるシロモノにはならない。つまりある意味では格闘ゲームでコマンドを出すのに似ていると言える。

が、それに馴染めない者たちは握った剣をやたらと振り回すばかりで、初期状態で習得できる基本の単発技を出していれば勝てるはずのイノシシやオオカミに遅れをとる結果となった。それでも、HPがある程度減った時点で戦闘に見切りをつけて離脱・逃亡していれば、死という結果を招くことはなかったはずなのだ――。

スクリーンを通して2Dグラフィックの敵を攻撃するのと違い、SAOでの戦闘はその圧倒的なリアリティーゆえに原始的な恐怖を呼び起こす。どう見ても本物としか思えないモンスターが凶悪な牙を剥き出して自分を殺そうと襲ってくるのだ。

ベータの時ですら戦闘でパニックを起こす者がいたというのに、現実の死が待っているとなればなおさらだ。恐慌に陥ったプレイヤーは、技を出すことも逃げることもすら忘れ、HPをあっけなくゼロにしてしまいこの世界から永遠に退場することとなった。

自殺。モンスター戦における敗北。すさまじい速さで増えていく無慈悲なラインを刻まれた名前たち。

その数がゲーム開始一ヶ月で二千人という恐るべき数にのぼった時、残った全プレイヤーを暗い絶望感が包み込んだ。このペースで死亡者が増えつづけるなら、半年年経たないうちに一万人が全滅してしまう。百層突破など夢のまた夢だ。

だが——人間というのは慣れるものだ。

一ヶ月後と少したった頃に第一層の迷宮区が攻略され、そのわずか十日後に第二層も突破された頃から、死者の数は目に見えて減りはじめた。生き残るための様々な情報が行き渡り、きちんと経験値を蓄積してレベルを上げていけばモンスターはそれほど恐ろしい存在ではないという認識が生まれた。

このゲームを攻略し、現実世界に戻るかもしれない。そう考えるプレイヤーの数は、少しずつ、だが着実に増えていった。

最上層は遥かに遠かったが、かすかな希望を原動力にプレイヤー達は動きはじめ——世界は音を立てて回りだした。

4つのグループ（後書き）

ただ書き写しただけなので誤字・脱字があつたかもしれません。
次は、黒の剣士からはじめようかと思っています！
感想とか待ってます！！

ポッタクリ店主と黒尽くめ（前書き）

やっと、黒の剣士に入りました。

今回はあの二人との関係を書いてみました。
では、どうぞ！

ポツタクリ店主と黒尽くめ

SAOが始まってから約1年と3ヶ月が経った。

その間にプレイヤーたちは着実にゲームに順応していき、今の最前線は第58層まで攻略していた。

ちなみに俺はレベル81。他のプレイヤーに比べると結構高い数値だ。そしてずっとソロでやってきている。

俺はブルーサマランダーとの戦闘を終え、今借りてる宿がある第50層、アルゲードに戻ってきていた。アルゲードはSAO内では有数の大型な街であり、完結に表現すると《猥雑》の一言に限る。広大な面積いっぱいには無数の隘路が重層的に張り巡らされていて、一度迷い込むと2、3日戻って来れないとまでいわれている。

毎回、新しい街の場所が分かると俺はその街に行き、隅々まで回って立体マップを登録できる《ミラージュ・スフィア》というアイテムに細かく記していくのだが、このアルゲードは他の街の3倍も時間がかった。

宿に戻る前にアイテムを処分しておこうと思い、馴染みの買取屋に足を向けた。程なくして一軒の店にたどり着く。この店の店主とも知り合いで、俺は大抵アイテムを処分するときはここを利用している。

中に入ると、店の中はがらんとしていた。奥にいた店主を見つけ、声をかける。

「よっす、エギル。阿漕な商売のし過ぎで客が来なくなっただか？」

店主がこちらを振り向く。

「レイトか。バカ言え、こんな朝っぱらから店に来るのはお前ぐらいいしいねーんだよ」

この店の店主、エギルと軽口を叩き合う。百八十センチはある体軀を筋肉と脂肪でがっちり包み、その上に乗った顔は悪役レスラー並みの岩から削りだしたようで、さらに唯一カスタマイズできる髪型をつるつるのスキンヘッドにしている。それがエギルだ。ちなみに今は午前2時である。

「大事な睡眠時間奪って悪かったな。まあ、いいもん持ってきたから許してくれよ」

「ま、レイトは常連さんだしな。どれどれ・・・」

俺がトレードウィンドウを提示すると、エギルがそれを覗き込んだ。エギルの両目が、トレードウィンドウを覗き込んだとたん驚きの色を示した。

「おいおい、これはブルーサラマンダーの素材じゃねえか。いいのか？丸ごと売っちまって」

「ああ、俺はまだ装備を新調しなくていい」

そこまで言ったところで、後ろの入り口が開いた。一人のプレイヤーが中に入ってくる。

「あれ、レイトか？こんなところで会うなんて珍しいな」

そうやって入ってきたのは、黒髪の全身を黒で固めている少年だ。名前をキリトという。

俺と同じくアルゲートを拠点としていて、攻略組の一人なため、フィールドではよく会ったりする。

「俺はいつも、このくらいの時間にここに来るからな。お前もここを利用してたのか、クロノ」

「いい迷惑だ。その所為で俺は毎回起こされるんだけどな」

エギルの店は意外と、と言っちゃいけないが結構繁盛している。そのため、他に客がいなくて、早めに用事を済ませやすい早朝にこの店に来ることにしている。ちなみに、クロノというのは俺がキリトにつけたあだ名で、彼の二つ名の《黒の剣士》からとっている。

「だからクロノはやめてくれって。それで、何の取引してんだ？」

キリトも俺のトレードウィンドウを覗き込んで来る。

「うお、ブルーサラマンダーの素材かよ。よく倒せたな」

キリトもエギルと同様、驚きの表情を示す。

「あ、爪があつたらくなれないか、防具に必要で」

「エギルに売るんだから、売った後にそれを買えばいいんじゃないのか？」

「いや、エギルから買うと値段をぼったくられるんだよな・・・」

「ああ、それは分かる」

「お前ら、そういうのは本人の前で言うもんじゃねえよな」

エギルが苦笑する。エギルは商人なのにもかかわらず、自己犠牲という言葉からはかけ離れている。

「よし乗った。というわけでスマンなエギル。爪はクロノに売るわ」

「ああ、分かった。それ以外のやつだけでも、十分助かるからな」

取引を成立させ、トレードを終わらせる。俺はウィンドウを閉じて、店から出て行こうとした。

「この後、レイトはどうすんだ？何も用事ないなら、これから知り合いのギルドとレベ上げに行くんだけど・・・」

後ろのキリトから誘いの声がかかる。しかし、俺は片手を上げて

「悪い、ちょっとやることがあるんでね」

と、断った。これから、スキルの熟練度を上げに行くためだ。別にそれだけなら誘いに乗ってもいいのだが、俺はまだ、友人たちにもユニークスキルを見せたことが無い。そのため、このごろは全くパーティーを組まずに、一人で狩るようにしている。

そのまま、店から外に出た。

ポツタクリ店主と黒尽くめ（後書き）

もうちょっと深くキリトの説明はしたかったけど、作者ではこれが限界ですね。

明日から、合宿に行くんで1週間くらい小説投稿とまると思います。終わったらすぐ書きますので、よろしく願います。

感想とか色々待ってます！！

少女との出会い（前書き）

お待たせしました、久しぶりの投稿です。

シリカを描写だけ出してみました。

話の中にオートスキルが出てきますが、作者の創作物です。
では、どうぞ！

少女との出会い

今俺は、35層の北部に広がる広大な森林地域、通称《迷いの森》にいた。ここは、その名の通り、暮盤上に分割された数百のエリアで構成されており、踏み込んでから一分経つと、東西南北の隣接エリアのへの連結がランダムに入れ替わってしまう仕組みになっていた。更に転移結晶も使えず、森から出るには走り抜けるか、地図を買うかなどの方法しかない。

そして何故俺がここにいるかというと、道に迷ったわけではなく、逆にこれを利用してしようと考えたからだ。

一分ごとに周りのエリアが変わるため、当然いきなり真横や後ろに敵が現れることがある。それを利用して、反射神経を高めようというわけだ。

ちなみに、俺の武器や装備も変わっている。武器は銃ではあるが、片手で持てるサイズで、銃身部分が縦に分厚くなっていて、上下には刃がついている。銃口周辺にも切り裂けるように、鋭くなっている。それが二丁。銃による近接戦闘スキル《銃火器》派生、《銃衝術》だ。

何故ユニークスキルなのに、派生まであるのかというのは、話すと長くなるので今度説明しよう。

装備も、コートのような朱の上衣の戦闘衣に変わっている。これは、モンスターからのドロップで毒、麻痺などの状態異常をある程度緩和できる上に、暑さ、寒さも完全に通さないという優れものだ。しかし、守備力は紙のように低いのため、使っているプレイヤーはほとんどいない。

それでも俺がこのコートを使っている理由は、相手からの攻撃を食らわない自信があるからだ。

それに、逆に硬い装備を身に着けていると、自分が守られているというわずかな安心を生んでしまうからだ。その安心は時に命取りに

なる。

もうここに入って、3時間になろうとしていた。エギルの店に行ってから、一度部屋に戻って仮眠してからここに入ったため、もう辺りは暗くなりかけている。

また一分経ち、周りのエリアが変化する。周囲に索敵スキルをかけたが、モンスターはいなかった。

「そろそろ、帰るかな・・・」

もうスキルの熟練度も、予定していた所までは上がったし、次のエリア変動が終わったら帰ることにした。

程なくして時間が経ち、エリアがまた変化する。変化し終わった瞬間、前方に敵の反応を確認する。

二丁銃を構え、敵の方向へ走り出す。すぐにモンスターの姿が目に入り、名前が上に表示される。

《ドラנקエイプ》、この迷いの森で出現する中で最強クラスの猿人だ。この森の中ではだが。

数は3。気づかれる前に狙いを定め、引き金を引く。

放たれた弾丸は、全て猿人たちの頭にのみ込まれていき、触れた瞬間残りのHPに関わらず、ポリゴンの欠片となって粉碎した。

俺が習得しているオートスキルのおかげだ。オートスキルとは、特定のスキル熟練度が一定値に達すると、覚えられるスキルで1度習得すると、それ以降別のスキルに変更しても常に働き続けるスキルだ。

今発動したのは《ヘッドショット》。銃火器スキル熟練度が500で習得できるスキルで、銃系武器で相手の東部に当たる部分に攻撃を当てた時、一定確率で残りHPに関わらず、相手に止めを刺すことができるスキルだ。

更にこのスキルは、熟練度が上がれば上がるほど発生確率が上がるというオマケつきだ。今の俺だと、8割の確率で発生する。

ポリゴンの欠片が完全に消え去ったその時、ドラंकエイプ達がい
た場所に何かが近づいてくる。仕舞いかけてた銃を構え、引き金を
引こうとして、突っ込んできたものが目に入る。それは、まだ幼い
少女だった。辺りが見えていないようで、ものすごい勢いで一直線
に突き進んでくる。

無理やり腕をそらし、弾丸の軌道を変える。ギリギリ間に合い、弾
丸は少女のすぐ隣にあった木に命中する。

しかし、その音で少女がこちらに気づいてしまった。

あ、しまったなどと思ったときには、もう遅かった・・・

少女との出会い（後書き）

感想とか待ってます!!

使い魔蘇生パーティー結成！（前書き）

SAO8巻出ましたね！とても面白かったです。
今回はシリカとの会話です。
では、どうぞ！

使い魔蘇生パーティー結成！

シリカは、SAOでは珍しい《ビーストティマー》だった。ビーストティマーとは、とても低い確率で敵モンスターを飼^{テイミング}いならし、自分の《使い魔》として使うことができるプレイヤーのことを指す。彼女は中でも珍しい《フェザードラ》という竜種のモンスターをテイムしていた。

だった。というのは、今日の冒険で些細な口論をしてしまい、迷いの森でパーティと分かれてしまった。そのため、迷いの森で迷い、《ドラクエイプ》の集団に《フェザードラ》は、ピナと名前をつけていたのだが、殺されてしまったからだ。

ピナが消えたのを認識した瞬間、体の中で何かが切れたのを感じた。その怒りを目の前の猿人たちにぶつけようと、猛然と突っ込もうとしたのだが……。

突如猿人たちがポリゴンの欠片となって消え失せ、その後自分の真横に何かが飛んできて、横にあった木に衝撃が起こった。驚いて、何かが飛んできた方向を向くと、朱色のコートらしきものを着た男性プレイヤーだった。

あー、ドジった。こんな迷いの森の奥になんて、誰も来ないかなどと思ってた所為で銃^{これ}がばれてしまった。などと思いつつ、俺はどう言い繕うか考えていた。

先に相手の出方を伺おうと思って少女の方を見てみたが、どうにも相手の出方を伺おうとしたのだが、少女の方は今にも泣き出しそうになっている。

「あー、無事か？」

こちらから声をかけると、少女は緊張の糸が切れたようでその場へたりと座り込んだ。

「お願いだよ……私を独りにしないでよ……ピナ……」

少女はそのまま泣き始めてしまった。何か大切な物が死んだのだろう、ピナと言うからにはプレイヤーではないのだろうか……とりあえず、少女に事情を聞いてみると、一年間ともに過ごして来た使い魔が死んでしまったそうだ。

どうしたものかと考えているとふと、視界の隅に羽のような物が入った。それを見てあることを思い出した。

「四十七層に使い魔専用の蘇生アイテムがあるらしいんだが……」

それを聞くと少女は立ちあがって、ずいっと顔を近づけてきた。

「ほんとですか!」

「あ、ああ。そこに使い魔の羽があるだろ、なんでも四十七層でテイマー本人が行くと採れるプネウマの花を3日以内にその羽に使うと使い魔が蘇生できるって話を聞いたことがある」

少女の顔が近づき、ドキマギしながらもこの前聞いた話を言い切る。それを聞いた彼女は、喜んだもののすぐに悲痛な面持ちに戻ってしまふ。

俺はトレードウィンドウを開き、余っていた装備一式をトレード欄に移す。すると不審に思ったのか、少女の方から声をかけてくる。

「あの……」

「その装備で七、八レベ位はごまかせる。まだ少しとどかないけど、俺もいっしょに行くから多分大丈夫なはずだ」

「えっ……」

少女がこちらの方をじっと見てくる。多分俺がグリーンかどうか見ているのだろう。もちろん俺は人を殺したことは無いのでグリーンだ。それを確認し終わってまた少女が口を開いた。

「なんで……そこまでしてくれるんですか……?」

まあそうなるだろう。自分が相手にこんなことを言われても、警戒心が先に立つし、そもそもアインクラッドでは《甘い話にはウラがある》というのが常識となっている。

「笑っていて欲しいからかな」

「は?」

「いや、せっかくSAOというゲームをプレイしているんだったら、存分に楽しもうよ。今この世界にいるんだったら、この世界に居るときにしかできないことをやって楽しんだ方がおもしろい」

我ながらかなりクサイ台詞だと思う。だけど、これは俺がこのデスゲームの中でいつも忘れないようにしてきたことだ。すると、少女がいきなり嘔き出した。

「ぶっ……、笑っていて欲しいからなんてクサすぎますよ。あはははっ」

確かに自覚はしていたはずだが、さすがに読み返されると結構ハズい。だけど少女の方に笑顔が戻った。それでよしにしようと無理やり思い込む。

「よろしく願います。助けてもらったのに、その上こんなことまで・・・あの・・・こんなじゃ、全然足りないと思うんですけど・・・」

トレードウインドウにコルが表示される。おそらく少女の持っている全額なのだろう。それに首を振ってから答える。

「いや、お金はいいよ。前使って使わなくなったものとか、余ってたものだし。それより、1つこっちの頼みを聞いてほしいんだけど」

頼みと聞いて、少女の体がびくつと動いた。

「・・・頼みですか・・・えと、なにを・・・」

「あー、君の想像してるのとは違うぞ。これを黙っといってくれないか？」

「え？」

俺は腰に吊った2丁の銃を指して言った。少女の方は、いままで使い魔のことで頭がいっぱいだったようで、初めて銃に気がついたらしい。ぱちぱちと何度か瞬きしてから、答えた。

「そんなことでいいんですか？」

「ああ、俺にとってはかなり重要なことだからな」

「じゃあ、改めてお願いします」

そう言って、ペコリと頭を下げてくる。

それを見て、コルをもどしてから、OKを押す。

「すみません、何からなにまで……。あの、あたし、シリカって
います」

「俺はレイト、これからよろしく」

俺はミラージュ・スフィアを取り出すと、シリカと共に出口へと歩きだした。

使い魔蘇生パーティー結成！（後書き）

どうだったでしょうか？

レイトは現実でのキリトとの接点が無いので、こんな感じになりました。

あと、これから投稿速度が遅くなると思います、リアルでいろいろあるので・・・

これを読んでくれる皆さんには申し訳ないです。

感想とか待ってます！！

中層プレイヤーのアイドル（前書き）

今回はロザリマと話すところからです。
では、さっさとー！

中層プレイヤーのアイドル

俺はシリカを連れて、35層主街区まで戻ってきていた。この層自体はほのぼのとした雰囲気があるが、中層プレイヤー達の狩り場となっているため街は人で溢れていた。

俺よりもこの層に詳しいシリカに連れられて、大通りを通り転移門のある街の広場を抜ける。すると、数人のプレイヤーがこちらに話しかけてきた。当然、俺に対してではなく、シリカにだ。話を聞いてみると、シリカをパーティに誘いたいらしい。このSAOの中では、女性プレイヤーの比率は圧倒的に低い。さらに、現実^{リアル}の顔が出てしまっているため、容姿まで整っているプレイヤーは限りなく少ない。そんなプレイヤーがパーティにいれば、土気も大幅にあがるだろう。多少熱狂的すぎる気がしないでもないが。

「あ、あの・・・お話ありがとうございますけど・・・」

シリカの方も丁寧に断ってはいるものの、若干辟易しているようだ。

「・・・しばらくはこの人とパーティを組むことになったので・・・」

「

そこで俺に振りますか！と内心で叫びつつ、とりあえず呼ばれたので前に出る。すると、もうすっかりシリカの取り巻きとなっていたプレイヤー達の視線が、一斉に俺に集中する。それらの視線には、全く好意的な物はない。

「おい、あんた」

両手剣を装備した青年プレイヤーが高圧的な態度で話しかけてくる。

「見ない顔だけど、抜け駆けはやめてもらいたいな。俺らはずっとこの子に声をかけてるんだぜ」

俺の装備を見てたいしたことないと感じたのか、見下すように言ってきたその物言いにイラツときた。敬語を使えとまでは言わんが、人を見かけだけで判断するのは具の骨頂だ。

「あんな、自分達が一番彼女の事を知っているみたいなこと言ってるけど、彼女にだって意志があるんだよ。誰が一番声をかけたからパーティに入れるってのは、おかしいんじゃないか？現に、彼女は四十七層に行きたがっているが、そこまで行けるのか？おまえ達は」

場が険悪なムードになりかけたところで、シリカが助け舟を出してくれた。

「あの、あたしから頼んだんです。すいませんっ」

シリカは最後にもう一度頭を下げて、俺のコートを引っ張ってメインストリートまで俺ごと引っ張っていった。プレイヤーの姿が見えなくなっただけで、俺のほうに向き直る。

「・・・す、すいません、迷惑かけちゃって」

「いや、俺は大丈夫。にしても、毎回あんなのか？だったら、人気者は大変だな」

「ただマスコット代わりに誘われただけなんです、きつと。それで、調子に乗っちゃって・・・」

「大丈夫だって。ピナも絶対生き返るから」

そういつてやると、シリカも笑顔に戻った。

しばらく歩いていると、《風見鶏亭》と名のついている宿屋に着いた。多分シリカが泊まっている宿なのだろう。

「あ、レイトさん。ホームはどこに・・・」

「ああ、五十層のアルゲード。色々やりたいことあったから今日はもうこの層に泊まるうかと思ってただけ・・・」

「そうですか！」

シリカがうれしそうに笑う。うん、女の子は笑っているのが一番だ。注意しておくが、ロリコンではない！！

「ここのチーズケーキが結構いけるんですよ」

「へえ、後で詳しく教えてくれ」

そんな他愛の無い話をしながら宿に入ろうとすると、宿の隣の道具屋から5人の集団が出てきた。

ケーキの話題で盛り上がりながらシリカが俺を引っ張る様な形で宿に近づくと、宿の隣にある道具屋から、五、六人の集団がぞろぞろと出て来た。今日、シリカと行動を共にしていたパーティだ。

その最後尾に居た女が、こちらに気づくと、シリカが顔を伏せる。知り合いか？と思いもう一度見ると

あちらの方から声をかけてきた。

「あら、シリカじゃない」

声をかけられ、立ち止まる。

見た瞬間顔を伏せたことから2人の関係は余りいいものではないのだろう。

「・・・どうも」

「へえーえ、森から脱出できたんだ。よかったわね」

名前はロザリア。彼女は口の端を歪める様な、嫌な笑い方をしながら話を続けた。

「でも、今更帰ってきてても遅いわよ。ついさっきアイテムの分配は終わっちゃったわ」

「要らないって言ったはずですよ！——急ぎますから」

シリカは早く話を切り上げたいのだろうが、彼女がそれを許さない。シリカの肩を見て、また嫌な笑いを浮かべる。

「あら？あのトカゲ、どうしちゃったの？」

ピナのことだろう。この世界で使い魔がティマーの近くに居ないことはありえない。つまり死んでしまったことを知っていてわざと言っているのだろう。

怒りがふつふつと湧いてくる。どうしてこう純粹に楽しむことをしないのか・・・

「あらら、もしかしてえ・・・？」

「死にました……。でも！」

シリカがロザリアをにらみつける。

「ピナは、絶対に生き返らせます！」

そう断言した彼女の瞳には強い意思がこもっていた。これなら精神的にも大丈夫だろう。

「へえ、てことは《思い出の丘》に行く気なんだ。でも、あんたのレベルで攻略できるの？」

「問題ないだろう」

ここで割り込む。シリカの前に出てシリカを後ろのほうに隠す。

「彼女にはきちんと意思があるし、俺もついていくから大丈夫だ」

すると、ロザリアは俺の体をじろじろ眺めてからまた笑みを浮かべた。

「あんたもその子にたらしこまれた口？見たトコそんなに強そうじゃないけど」

「装備で人を判断するのはやめたほうがいいぞ。俺はお前の倍くらいのレベルはある」

「ははっ。ホラを吹くのもいい加減にしたほうがいいよ」

「行こう」

ロザリアの言葉を無視して、シリカを宿に入れ、その後が続いて宿に入る。

「ま、せいぜい頑張ってね」

そんな言葉が後ろからかけられた。

中層プレイヤーのアイドル（後書き）

感想とか待ってます!!

とりあえず食事から（前書き）

総合評価が100pt越えました、ありがとうございます！！
些細なことですがホントうれしいです。
では、どうぞ！

とりあえず食事から

《風見鶏亭》は一階がレストラン、その上が宿屋という形になっていた。

レイトはチェックインして来ると言っ、店の奥に歩いていく。その間に開いている席に座って待つて居ると、すぐにレイトが戻ってきた。

シリカはさっきの事を謝ろうと、口を開こうとするがレイトに手で制される。

ちょうどその時に、ウェイターが2つのカップを持ってきた。カップの中には水のようなものが注いであった。

「まずは食事から。それ、飲んでみてくれ」

レイトに言われ、シリカはおずおずとカップの中の液体を一口する。すると、口の中にピリツとした感触が走る。これは、現実世界でも飲んでいた……

「これ、サイダーですか!？」

それを聞いてレイトがにやつと笑みを浮かべる。それが肯定だということを示していた。もう一度飲んでみるが、やはりサイダーの味だ。でも、この店のメニューは全て試してみたはずなのだが、これは飲んだことが無かった。

「どうやって……?」

思っていたことが、口に出てしまった。そのつぶやきを聞いて、レイトが種明かしとばかりに話す。

「NCPのレストランはボトルの持込ができるからな。それで、それは俺の自作品だ」

「自作品？」

「ああ、味覚再生エンジンを使って作ってみたやつだ。結構似た味は出てるんだが、さすがに置いておくと炭酸が抜けるってのまでは再現できてないがな」

「へえー。レイトさんって料理できたんですね」

「やってみると結構楽しいよ、毎日同じもの食べなくていいし、色々作って楽しめるな」

レイトと話している間に、いつの間にかカップの中身が無くなっていった。懐かしい味だからつい飲み干してしまったようだ。久しぶりの味だったから、もう少し残しておけばよかったか……

「はは、心配しなくても、もつとあるから大丈夫だぞ。材料もレシピも覚えてるから、ホーム戻ればまた作れるしな」

顔に出ていたようだ。思わず顔の温度が上昇したのを感じた。その間に、レイトはアイテム欄からもう一本サイダーを取り出すと、シリカに注いでくれた。

「……なんで……あんな……意地悪言っのかな……」

ポツリと呟いたのをレイトが聞きとめると、顔に出していた笑みを戻す。

「シリカはMMOはこれが初めてか？」

「はい・・・」

「そつか。まあ、ゲームをやると人格が変わるやつは結構居るからな。ロールプレイングって言うのも役割に成り切るって意味だしな。本来ならばって話だが・・・」

そこで一旦レイトは話を区切って、もう一度続ける。

「今は皆、自分が生きているって事を証明したいだけなんだと思うんだ、俺は」

「証明？」

「ボスを倒す、アイテムを取る、人に認められる。そんなことをして自分はここに居るって事を言いたいだけなんだと思う。それが変な方向に走っちゃって、盗む、騙す、殺すなんて事をするのかもしれない。俺の考えだけだな」

「レイトさんですか？」

「ああ、俺もそうだ。だから、俺は楽しむことで自分を証明するようにしてるんだ」

ま、適当に流してくれ、と最後に付け加えてレイトは話を終わらせる。2人とも黙りこんでいると、ウェイターがケーキを持ってくる。すると、レイトがボソツと言った。

「チーズケーキにサイダーは合わなかったな・・・」

とりあえず食事から（後書き）

レイトが何でもできるようになって行ってる気がする・・・
感想とか待ってます！！

明日の説明（前書き）

PVで10000アクセス越えました、ありがとうございます！
これからもよろしく願います。
では、どうぞ！

明日の説明

食事を終えた後、明日に備えて早めに休むことにした。レストランの上に上がると2階はずらつと客室が並んでいた。俺が部屋を探し当てると、そこは以外にもシリカが取っている部屋の隣だった。シリカとお休みを言ってから、部屋に入った。

それから1時間くらい経った今、俺はミラージュスフィアを取り出し、いろいろなことを書き込んでいた。ミラージュスフィアには一度行った場所の立体地図を出せるだけでなく、その場所の情報などを書き込めるようになっていた。そのため今日あったことなどを書き込んでいた。

一通り書き終わりに、ミラージュスフィアを仕舞う。次に銃の整備をするために2丁の銃をアイテム欄から実体化させる。銃はまだアイツとシリカにしか見せたことが無いため、整備（スキルのには研磨だが）は自分で行っている。ちなみに、作成も俺しかできない。だから、俺のスキルスロットは作成や研磨などの職人系スキルや趣味の料理などの非戦闘スキルで半分以上埋まっている。

銃なのだが他の武器と同じように、回転研磨台の上に一定時間上げとけば耐久度が回復する。これもある事情のため詳しく作られていないからだ。ま、それは追々。

いつもの様に2丁の銃、銘は《ベガ》と《シリウス》を回転研磨台の上に乗せると、扉に2回ノックがあった。俺は立ち上がって、ドアの前で尋ねた。

「こんな時間に、誰だ？」

つい1時間くらい前に分かれたばかりの少女だった。

「あ、シリカです・・・」

それを聞いてから、扉を開ける。すると、チュニツクを身に纏ったシリカが部屋の前にいた。彼女を部屋の中に入れてから、俺はもう一度尋ねた。

「それで、どうかしたのか？」

シリカが少し沈黙する。それから少し慌てたように言った。

「ええと、あの―――よ、四十七層のこと、聞いておきたいと思つて！」

最後の方は早口になっている。多分今とつさに考えたのだろう。ん、分かった、と言ってシリカを椅子に座らせると、ベットに座ってさつき仕舞ったばかりのミラージュスフィアを取り出す。小さな水晶球を見て、シリカが目をうつとりさせている。

「きれい・・・それ、迷いの森抜ける時も使ってましたけど、何ですか？」

「ミラージュスフィアっていうアイテム。一度行った場所のマップを出せるから、地図よりも役に立つんだ」

そういつて、四十七層の立体マップを出現させる。それを見てシリカが夢中で覗き込む。

「うわぁ・・・！」

「これが主街区でここが明日行く思い出の丘だ。この道を通っていくんだが、ここのモンスターが少しレベル高いから注意した方がいい

い。あとは、そうだな・・・ここの店が結構いい味の肉まん売ってたり・・・」

指先を使っ、四十七層の地理や情報を説明していく。丁寧に説明していき、説明が丘の少し前まで来たところで、あることに気づいた。

部屋の前にプレイヤーがいるのだ。それもさっきから全く動こうとしないで、この部屋の前にいる。話を続けながらも、扉に向って歩いていくのを不思議に思ったシリカが視線を向けてくるが、それに静かにというジェスチャーをして、扉の前に近づく。一気に扉を開くと、目の前にいた男に言い放つ。

「こんな時間に何の用事だ？というより、上はどこだ？」

盗み聞きをしていた男は、答えずに一目散に逃げていく。追いつこうと思えばいくらでもできるが、下手に捕まえない方が得策だろうと考えそのまま見送る。すぐにシリカが部屋から顔を出したが、もうその時には、男は階段を下りて行く所だった。

「な、何・・・!？」

「大方盗み聞きだろうな」

「え・・・でも、ドア越しじゃあ声は聞こえないんじゃない？」

「聞き耳スキルつてのを上げてれば、聞くことができるから・・・尤も上げててもたいしたことではないけどな」

シリカを部屋の中に戻し、扉を閉める。そしてテーブルの上の銃のところに向う。

「これ研いじやうからちよつと待っててくれるか？シリカにはもう見せたからしょうがないけど、他の人には見せたくないから」

「大丈夫ですけど・・・それって銃、ですよね・・・？」

「エクストラスキル《銃火器》ね。まあ、とあることで取ったんだよ」

「へえ・・・」

そこで話を切り上げ、銃の研磨に集中する。ただ乗せとくだけでもいいが、おざなりにすることはしない様にしている。

研磨はすぐに終わり、銃と回転砥石をアイテム欄に仕舞う。それから、シリカのほうに向き直った。

「時間も時間だし、少し早めに説明するが・・・」

と声をかけたが、彼女は俺のベッドの上でもう眠りに落ちていた。何度か体をゆすってみるが、一向に起きる気配はない。

「ここまで気もち良さそうに眠ってるのを、起こすつてもなあ・・・」

起こすのを諦め、掛け布団をかけてやる。それから、さつき起こったことを考えた。

多分、今俺たちは犯罪者ギルドに目をつけられている。シリカにはかわいそうだが、すこし荒事になるかもしれない・・・
そう考えつつ、俺は床で寝ることにした。

明日の説明（後書き）

感想とか待ってます!!

フラワーガーデン（前書き）

今回は戦闘の前までですね。
では、どうぞ！

フラワーガーデン

朝、いつもと同じように目が覚めた。ただし、床でだが。起き上がり、一度伸びをしてからベットの上のシリカがまだ寝ているのを確認して部屋を出る。一階に降りて、そのまま宿を出ると転移門に向かう。ただいまの時刻は午前5時だ。

程なくして転移門に着く。転移門の近くで売っている新聞、新聞と言っても現実世界のものとは違い1枚の羊皮紙でできていて、内容もS A Oの攻略関係がメインのものを情報屋ギルドが売っているだけのものなのだが、それを全種類買って宿に戻る。その後宿の隣のNPCの商店に寄って、今日使う消耗品を買い揃える。NPCの商店の消費アイテムはPCの商店に比べて少し高くなっているが、今の時間で開いているPCの商店は珍しいだろう。俺はエギルの店しか知らないし、そこだって俺がむりやり押しかけて行ってるようなもんだしな。

そして、買ってきた新聞を読みながら部屋の扉を開けると、ベットの上でシリカが両手で顔を覆って身悶えていた。この世界では扉を開けても音がしないため、まだシリカは俺が帰ってきたのに気づいていないようだった。とりあえず、一声かける。

「おはよう。よく眠れたか？」

「――！！」

シリカが驚いた様に顔を上げて、こっちの方を見てくる。それから、周りをキョロキョロと見渡して

「あ、え、えと・・・おはようございます・・・」

そのときに目が合つて、シリカの顔がカァツと赤くなる。さすがに昨日あったばかりの異性の部屋で寝るといふのは恥ずかしいだろう。すぐにシリカが目を逸らす。

「あの・・・その、すいませんでした・・・勝手にベット占領して・・・」

「大丈夫だから気にすんな、それより今日のことが・・・」

シリカが落ち着くのを待つて、今日の打ち合わせを始める。

それから朝食やら準備やらで1時間と少し経った。準備が終わった後、2人でゲート広場に向い、転移門で移動しようとしたのだがそこでシリカが立ち止まった。

「あ・・・。あたし、四十七層の街の名前、知らないや・・・」

そういえば教えてなかったか？シリカがマップで層の名前を確認しようとしたので、右手を差し出しながら、

「俺が指定するよ、そっちのほうが早いだろ」

シリカが差し出した腕をおずおずとつかんだのを確認してから

「転移！フローリア！」

一瞬視界が真っ白になった後、エフェクト光が薄れていき視界が戻る。目の前に無数の色彩が走る。

「うわあ・・・！」

隣でシリカが歓声を上げる。目の前には無数の花々で溢れかえり、今が盛りとばかりに咲き誇っている。

「すごい・・・」

「この層は通称^{フラワーガーデン}と呼ばれて、この層全体が花で溢れている。このほかにも北の端にある《巨大花の森》とか南西にある《虹の野原》とかも結構綺麗だぞ」

「それはまたのお楽しみにします」

シリカは笑ってから、近くの花壇の前に座り込んだ。SAOでは、《ディチール・フォーカシング・システム》なるものが投入されており、その人が視線を凝らしたものにリアルなグラフィックが見えるようになっていた。さつきからじっと花を見ているだけあって、シリカは花自体は好きなのだろう。この先に出るモンスターのことを想像しながら、心の中で合掌しておく。すると、シリカがこちらを見てきた。

「ん、どうかした？」

「あ、いえ・・・それよりフィールド行きましょう！」

「いきなりどうした？別にいいけど・・・」

なぜか、最後の方が早口になって言ったシリカが先に歩き出した。それについては特に深く考えもせず俺は先に歩いていくシリカの後を追った。

フラワーガーデン（後書き）

ほとんどストーリーに進んでないですね・・・
感想とか待ってます！！

ブネウマの花の採取（前書き）

区切るところがまちまちな所為で、1つの話の文字数にぶれが・・・
では、どうぞ！

ブネウマの花の採取

「さて・・・こつから冒険開始なわけだけど・・・」

「はい」

今はフィールドと街との境目の南門に来ている。俺の言った言葉にシリカが表情を引き締めて、頷いた。

「シリカのレベルと装備なら、ここのモンスターは倒せないほどでもない。だけど・・・」

もう一度シリカの顔を見て、続ける。

「フィールドでは何が起こってもおかしくは無いからな。もしも、予想外のことが起きたらすぐに転移結晶で街に戻ってくれ、そのときは俺のことは考えなくていい」

「で、でも・・・」

「死んだら元も子もないからな。俺も逃げに徹すれば、ここら辺のモンスターたちは振り切れる。だからその事だけは守ってくれ」

念を押すと、シリカは頷いてくれた。少し暗い表情になりかけるのを見て、ニツツと笑いながら締める。

「それじゃ、行こうか」

「はい！」

すぐに明るい笑顔を取り戻したのを確認して、俺はアイテム欄から武器を取り出す。現れたのは、

「短剣ですか？それも2本？」

取り出したのは2つの短剣。だが、少し秘密がある。右の短剣を少し上げて、

「まあ、銃は他にプレイヤーがいない時しか使わないからな。こっちは真正銘の短剣なんだけどな・・・」

そいつって左の手を振る。すると、短剣が4つに別れ、扇子状の形になる。

「これは短剣としても一応使えるが、ホントは投剣でな。投擲して使うんだ」

「そんなの初めて見ましたけど・・・」

「まあ、これも製造アイテムだから、普通の店では売ってないからな」

そのまま、4つの投剣を元に戻す。一通り武器の紹介を終えたところで、フィールドへ繰り出した。

シリカは足手まといになるまいとしているようだが、ここのモンスターを見ても大丈夫だろうか・・・
などと考えつつ、フィールドをザクザクと進んでいった。

「ぎゃ、ぎゃあああああ！？なにこれ——！？き、気持ちワル——」

——「!!」

フィールドに出てから数分後、最初のモンスターとエンカウントしたのだが、どうやら俺の予想は当たったようだった。今俺たちと敵対しているのは、一言で言うところ《歩く花》だ。この層は街だけでなく、モンスターなども《花》だ。目の前には、ヒマワリのような花の中にぱつくりと口の開いた、よくゲームであるような花型モンスターがいる。

「や、やあああ!! 来ないで——」

「アクティブモンスターだから、近づいてくるぞー」

「やだつてば——」

花好きだからこそその嫌悪感があるのだろう。シリカはほとんど目をつぶりながら短剣をぶんぶん振り回している。あれじゃあ、モンスターに攻撃が当たることは無いので、少し忠告してやる。

「きちんと見て攻撃しないと当たらんぞー。花の下少し白いところ突けば簡単に倒せるはずだから、やってみな」

「だ、だって、気持ち悪いんですうつう——」

「そいつはまだましな方だぞ? これが3つくっ付いたやつとか食虫植物みたいなものこの先いるぞ」

「キエ——!!」

もうそれ以上聞きたくないのだろう。変な奇声を上げながら滅茶苦

茶なソードスキルを繰り出す。当然その攻撃は空を切る。すると、2本のツタが技後硬直時間で動けないシリカの両足をぐるぐると捉え、その外見からは想像できない怪力でひょいと持ち上げた。

「わ!？」

ぐるん、と宙吊りにされてシリカの体が上下逆さまになる。当然彼女のスカートは、仮想の重力に馬鹿正直に従ってずりりと下がってしまふ。あわててシリカは左手でその裾を押さえて、右手でツタを切ろうとしているものの、体勢が不安定な所為でうまくいってない。シリカが必死に助けを求めてくる。

「れっ、レイトさん助けて!見ないで助けて!!」

「その2つは矛盾すると思うんだが・・・せいっ」

答えつつ、左手の投剣を指弾で投擲する。スキルは使っていないが、1つのツタに2本ずつ刺さり、ツタを断ち切る。ツタから開放されたシリカが体勢を直し、そのままソードスキルを放つと歩く花はポリゴンの欠片となって爆散した。するとシリカは振り返ると同時に訊ねてきた。

「・・・見ました？」

「・・・見てないよ」

絶対に見ていないと断言しよう。

その後、5回ほど戦闘をこなしたあたりでシリカもモンスターの姿にも慣れ、2人は快調に行程を消化していった。俺は戦闘ではほとんど攻撃せず、シリカが避けたり捌ききれていない敵の攻撃に対し

て、投擲してその攻撃を止める、ということに徹していた。パーティプレイではモンスターに与えたダメージの量によって経験値が分配されるため、ほとんど経験地はシリカの方にいき、彼女のレベルはたちまち上がっていった。

赤レンガの街道をひたすら進むと小川にかかった小さな橋があり、その向こうにひとときわ小高い丘が見えてきた。道はその丘を巻いて頂上まで続いている。

「あれが《思い出の丘》、今回の目的地だ」

「見たとこ、分かれ道は無いみたいですね？」

「ああ、頂上まで一本道だ。だけど、進むにつれてエンカウント率が高くなるから油断しない方がいい」

「はい！」

もうすぐピナが生き返らせられるとあって、シリカの歩く速度が早くなる。予想通りモンスターとのエンカウント率が高くなり、ひたすら向ってくるモンスターたちを振り返り討ちにする。シリカに渡した短剣は俺が前使っていた短剣で最前線では少し心もとないが、ここでは十分な威力を発揮する。その証拠にシリカが放つ連続技のワンセットで、大概のモンスターは落ちていく。そして、丘に入ってから俺が一人を残して投剣で撃破していくので、1つの戦闘は大して長引きもせず終わってしまう。

モンスターの襲撃を退けて、高く繁った木立の連なりをくぐり、やっと頂上についた。

「うわあ・・・！」

シリカが歓声を上げて、先に駆けて行く。

そこは木立に周囲を囲まれ、ぽっかりと開いた空間一面には美しい花々が咲き誇っている。

「ふう、ついたか・・・」

安全地帯に着いたことに一安心しながらシリカに歩み寄る。

「ここに・・・その、花が・・・？」

「ああ、そこに見える岩のてっぺんに咲くらし・・・って聞いてないし・・・」

シリカは俺が言い終わる前に走り出していた。彼女の胸ほどまである岩に駆け寄り、おそろおそろ上を覗き込んでいる。シリカの方に歩いていると、突然彼女の血相が変わる。

「え・・・」

シリカの元にたどり着いてみると、彼女がこっち振り返って叫んできた。

「ない・・・ないよ、レイトさん！」

「おかしいな・・・—— お、あれじゃないか？」

もう一度シリカを促して、岩の方に視線を戻させると、柔らかそうな草の間に、一本の芽が伸び始めているところだった。若芽は普通の花の成長速度の何倍もの速さで成長していき、やがて先端に大きなつぼみを結んだ。蕾は内部から真珠色の光を放っている。

レイトとシリカが見守る中、徐々にその先端がほころんで、しゃらんという音と共につぼみが開いた。

二人はしばらく身動きもせずに、咲いた花を見つめていたが、やがてシリカがこちらに確認するような目線を向けてきた。これを取ってもいいのか？そういう視線だった。

俺が一つ頷くと、シリカが意を決したように頷き返し花にそつと手をのばした。細い茎に彼女が触れた瞬間、花は氷のように碎けシリカの手に光る花だけが残った。

シリカがその花の表面をそつと指でなでる。すると、ネームウインドウが音も無く開いた。そこに書かれた名前は――《プネウマの花》。

ブネウマの花の採取（後書き）

どうだったでしょうか？

次回はタイタンズハンドとの戦闘ですね。

戦闘と呼べるものになるかどうかは分かりませんが・・・
感想とか待ってます！！

オレンジとレッドの境目ってなんだろう(前書き)

次回で黒の剣士の範囲が終わると思います。

次はどうしようか・・・

では、どうぞ！

オレンジとレッドの境目ってなんだろう

「これで、・・・ピナを生き返らせられるんですね・・・」

「ああ、その花の滴を形見に振りかければ、戻るはずだ。ここでやつても、問題はないんだが・・・ここは来た時に分かっただろうが、モンスターとのエンカウト率が高い。だから、とっとと宿に戻ってからにしたほうがいいだろう。ここで生き返って、帰り道でまた死んでしまった、じゃ元も子もないからな。それじゃ、そろそろ帰ろうか」

「はい！」

本当はここで使いたかったのだろうが、レイトの言葉を聞いて納得したシリカはプネウマの花をアイテム欄に仕舞う。

まずは、安全に街までたどり着くことが先だ。シリカを促して、もと来た道を戻り始める。

帰りは行くときに大量に狩ってしまったせいか、ほとんどモンスターとエンカウトしなかった。シリカもプネウマの花を手でできたせいか、足取りも速かった。

ほどなくして麓まで戻ってきた。あとは、街道を歩くだけだろうが、

ふと、索敵スキルに何かが引つかかった。見逃すわけではないと思っていたが、このタイミングで来たか・・・。

先でスキップしながら小川を渡ろうとしているシリカの肩に手を掛ける。シリカがびくつとしてこちらを振り返ったが、俺は視線を橋の向こう側からはずさなかった。そして、アイテム欄からこの時にために用意しておいた道具を取り出す。それを見てシリカが話しかけてきた。

「どうしたんですか・・・？それ、メッセージ録音クリスタルですよね？」

「うーん、ちょっとした野暮用というかなんとというか・・・。とりあえず、俺がこれ投げたら耳をふさいでくれ」

シリカはさらに訳が分からなくなったようだったが、それに構わず俺はタイマーを5秒にして橋の向こうにメッセージ録音クリスタルを投げつける。さて、いつまで耐えられるかな・・・。

橋の向こうにメッセージ録音クリスタルが落ちる。それから、本来の用途どおり、音声を再生した。

ギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリ

結晶から金属が嫌にこすれあう様な音が再生された。実質、高速研石に適当な金属をわざとこんな音が出るように当てたのだが・・・橋のこちら側でもこれだけの音量なんだ。向こうはどれほどの音量になるのか。ちなみにこの音は10分間流れ続けるぞ。

すると不意に誰かが出てきて、メッセージ録音クリスタルを叩き割った。それを確認して、

「結構高かったんだけどな・・・。目的は果たせたからよしとするか」

「え・・・！？」

音が消えて耳に手を当てていたのをやめたシリカが俺の言った言葉に驚く。すると、さっき出てきた男だけでなく、橋の向こうの草む

らからぞろぞろとプレイヤーが出てきた。ざっと数えて十人くらいか。色はほとんどがオレンジが多いが・・・。

さらに、橋の向こうに出てきた顔の中に昨日見かけた顔があった。

「ろ・・・ロザリアさん・・・！？ 何でこんなところに・・・！？」

出てきたプレイヤーの一番前にいたのは、昨日宿の前であったロザリアだった。彼女は、シリカの問いには答えず、俺のほうを睨んできた。

「よくもやってくれたわね、あんたの索敵スキルは認めるけど、あんたにはマナーってものが無いのかしら」

「オレンジにマナーについていわれるとはな。尤も、お前らも持ち合わせていないだろう？。マナーの無いものにマナーを持って接する理由が無い」

オレンジとはオレンジギルドやオレンジプレイヤーを主に指す言葉で、システム上の罪を犯したものがなるカーソルの色からそう呼ばれている。

俺がロザリアからの罵倒を軽く流すと、ロザリアは今度はシリカのほうに視線を向けた。

「その様子だとし、首尾よく『プネウマの花』をゲットできたみたいね。おめでと、シリカちゃん」

シリカがロザリアの真意がつかめず、数歩後ずさる。すぐにロザリアが続けた。

「じゃ、さっそくその花を渡してちょうだい」

「・・・！？な・・・何を言ってるの・・・」

俺はシリカの前に出て、シリカを背中後ろに隠す。

「そろそろいいか？とつと道を開ける」

「は？あんた今なんて言ったの？」

「だからオレンジギルドとの戦闘なんて時間の無駄だから、とつと道を開けるって言ってるんだ」

「え・・・でも・・・だって・・・ロザリアさんは、グリーン・・・」

「

俺がロザリアと話をしているとシリカが質問してきた。シリカのほうに向き直り、説明する。

「全員がオレンジだと、街で動きにくいからな。何人かはグリーンが入っていて、オレンジギルドの狩る得物を見繕ってるんだ。昨日、部屋を盗聴してたのもそのグリーンの奴だ」

「そ・・・そんな・・・」

シリカが愕然としながらロザリアを見る。

「じゃ・・・じゃあ、この2週間一緒にパーティにいたのは・・・」

「ま、シリカが前いたパーティの戦力評価って所だろう。だけど、

シリカがプネウマの花を取りに行くって聞いたからこっちに獲物を変えたんじゃないか？」

そこで話を区切ると、ロザリアが割り込んできた。

「そんなところね。でもあんた、そこまでそこまで分かってながらノコノコその子に付き合うとか、馬鹿？それとも本当に体でたらしこまれちゃったの？」

「邪魔だ、どける。これ以上お前と話している時間がもつたいない」
オレンジにどうこう言っただって意味が無い。殺気を橋の先にいるオレンジたちにぶつけると、オレンジたちは一瞬ひるんだが、動こうとはしなかった。

「でもさあ、たった二人でどうにかなると思ってんの……？」
十人ほどのプレイヤーたちは武器を構えた。全員がニヤニヤと笑いながらこちらを見てくる。

「はぁ……。警告はした、死んでも文句は言わせないからな……」
俺は武器に手を掛けた。

オレンジとレッドの境目ってなんだろう（後書き）

レイトはSですね、はい。

また変なところで区切ってしまった・・・

次回で本当に終わるかな？

感想とか待ってます！！

臆病な殺戮者（前書き）

投稿遅れました、すいません！

テスト期間中なので、両親に見つからない様に書いてたら・・・
今までかかってしまいました。

結局黒の剣士の範囲終わりませんでした。

では、どうぞ！

臆病な殺戮者

「れ、レイトさん・・・人数が多すぎます、脱出しないと・・・！」

俺の後ろに隠れていたシリカが小声で囁きかけてきた。

「うーん、確かにそうした方が良さかもしれないなあ。この人数だと片付けるのに少し時間かかるだろうし、だったら多少値は張るが転移結晶使った方が早く帰れるか・・・？」

「え・・・？いや、そういうことじゃなくて・・・」

どうする？この人数相手にすると3分はかかるし、銃使えばもつと短縮できるけどこんな奴らにユニークスキル見せるのも馬鹿馬鹿しい。それだったらシリカが言うように転移結晶使った方が早いかな？でも、こいつら野放しにすることになるんだよねあ。そうになるとまたシリカに被害が出ないと言い切れないし、よし。

「ま、ちょっと時間かかるけど待ってくれや」

シリカの頭をぽんぽんと軽く叩くと、そのまま橋に向って歩いていく。どうやって時間短縮するか考えていると、後ろから呼びかけられた。

「レイトさん・・・！」

その声がフィールドに響いた途端――。

「レイト・・・？」

不意に賊の一人が呟いた。さっきまでの笑いを消して、記憶を手繰るように視線を彷徨わせている。

「朱のコートと両手に短剣……——《臆病な殺戮者》……」

急激に顔を蒼白にしながら、男が数歩後ずさる。

「や、やばいよ、ロザリアさん。こいつ……攻略組だ……」

オレンジたちの顔が一樣に強張った。まあ、そうだろう。最前線で未踏破の迷宮に挑み、ボスモンスターを次々と屠り続ける《攻略組》がこんなところにいるのだから。後ろで同じように驚いているシリカみたいな《ビーストテイマー》よりも《攻略組》は珍しいと言われている。更にその中でも珍しい二つ名持ちなのだから、彼らの動揺は大きい。

「こ、攻略組がこんなところをウロウロしてるわけじゃない！どうせ、名前を騙ってびびらせようってコスプレ野郎に決まってる。それに——もし本当に《臆病な殺戮者》だとしても、近づけばたいしたこと無いわよ……」

「そ、そうだ！攻略組なら、すげえ金とかアイテムとか持ってんぜ！オイシイ獲物じゃねえかよ……」

ロザリアの一言で勢いづいたように、オレンジたちが叫んだ。

「あのなあ。名前騙ってびびらせよう、ってだけでこんな紙みたいな守備力の防具をフィールドで着けてる奴なんているわけないだろ

うが。それにコスプレするなら《黒の剣士》とか《神聖剣》とかの方が有名だと思っけだな・・・」

ぼやきながらも、橋がかかっている先端にたどり着くと、またシリカに呼びかけられた。呼びかけられたというよりは、叫ばれたの方が正しいか。

「レイトさん・・・無理だよ、逃げようよ!!」

シリカの声には応えず、両腕をだらりと下げる。一応これが俺の1年間の経験で、次の行動に最も早く移せる構えだ。それをオレンジたちは諦めと取ったのか、ロザリアなどのグリーンプレイヤーを除いたオレンジたちが武器を構え、猛り狂った笑みを浮かべ、こちらへ向ってきた。短い橋をドカドカと駆け抜け――

「オラアアア!」

「死ねやアアア!!」

半円状に取り囲み、斬りかかろうとして――

ドサッ・・・

一番最初に斬りつけてこようとした、刀を持った男の腕が落ちる。落ちた腕はポリゴンの欠片となって消えていく。《部位破壊》だ。部位破壊とはHPとは別にある体の各部の耐久度がなくなった時、その部位が消滅するシステムだ。消滅といっても永久ではなく、街の中などに戻ればすぐに再生はするが。

「は・・・?」

腕を破壊された男が呆けたように呟く。それを見て、一瞬オレンジたちの動きが止まる。その間にまた一人の腕が飛ぶ。

「お・・おい、お前・・今、何しやがった・・!」

「何って、部位破壊だけど?」

「そうじゃなくて、どうやって部位破壊したんだよ!!」

「こうやって」

男と喋っている間にスキルの待ち時間デレイが終わり、もう一度短剣スキル初級間接技《ショートスラッシュ》を放つ。短剣から、薄い水色の小さな衝撃波が目にも止まらぬ飛び、また一人の腕を飛ばす。前の2回もこれを使ったただだ。ひたすら敏捷力にパラメータを振っていた俺の衝撃波は、もう斬撃と呼べるまでの速度になっていて、さらに腕の中で最も耐久度が低い腕の付け根を狙っているため簡単に部位破壊ができた。

3人目が部位破壊にあつてようやくタネが分かったのか、残ったオレンジたちが一斉に武器を振り回してくる。

「あともう一つ言つとくが、俺は《近づかない》んじゃなくて、《近づかせない》んだよ」

武器の射程に俺を入れた奴から部位破壊をしていく。スキルの待ち時間デレイ中に近づいてこようとする奴には投剣で足止めし、両手武器や重装備をしている奴らは足を切り落としていく。

これが俺が《臆病な殺戮者》と呼ばれている由来だ。絶対に相手の射程に入らず、その位置からひたすら相手を攻撃していき、一撃も

食らわずに片付ける。

斬る、斬る、斬る、斬る、斬る、斬る

数分もしないうちに、俺に向ってくるオレンジは一人もいなくなつた。目の前には腕や足などを切り落とされ、戦意を失ったオレンジたちがいる。彼らの顔には恐怖が張り付いている。

「む、むちゃくちゃじゃねえかよ・・・」

「ああ、そうだ。だが、それがどうした？お前らも重度のネットゲーマーだったなら分かるだろう？それがレベル制MMOの理不尽さだって」

レベル差があるだけで、ここまで無茶な差がつく。圧倒的な、戦略だけではどうにもならない差が。

「チツ」

不意にロザリアが舌打ちすると、腰から転移結晶をつかみ出す。それを宙に掲げ、口を開く。

「転移けっ——」

その言葉が言い終わらぬうちに、投剣と投擲し転移結晶に当てる。パリンと音を立てて転移結晶が砕け散った。

「ひっ・・・ど、どうする気だよ畜生!!」

さて、こいつらをどうするか・・・。ほっとけばまた悪事を再開するだろうし、かといって全員牢屋^{ジェイル}までつれてくのも面倒だ。

「おい、ちょっと待ってくれ！」

いい解決策が浮かばず悩んでいると、街道の方から見覚えがある黒
尽くめが走ってくるのが目に入った。

臆病な殺戮者（後書き）

レイトは依頼主との関係が無いので、キリト登場です。
次で終わるといいな・・・
感想とか待ってます！！

長かった一日の終わり（前書き）

久しぶりの投稿ですね・・・
ちよくちよく書いてはいたのですが、納得できるのができなくて遅くなりました。
ではどうぞ！

長かった一日の終わり

街道の方から走ってきたのは、黒の剣士ことキリトだった。キリトは橋の近くまでくると、あたりの惨状を見て、こちらに顔を向けた。

「よっす、クロノ。お前がこんな中層まで降りてくるのは珍しいな」

「よっすって・・・これ、やっぱりお前がやったのか？」

「あっちから仕掛けてきたんだから、正当防衛だ。それにまだましな方だと思うが？」

それは事実だ。今のレイトのレベルとスキル熟練度があれば、オレ
ンジたちの四肢全て切り落とすことも簡単にできる。今それをしな
いのは、面倒だから。ただ、それだけの理由だ。

「レイト、こいつらの処遇、俺に任せてくれないか？」

「クロノが？まあ、俺も決めかねてたから別にいいけど」

キリトは俺の返事を聞くと、腰のポーチから青い結晶を取り出した。転移結晶も青色をしているが、それはもっと濃い青だった。回廊結晶、基本は転移結晶と同じだが、転移結晶はその層の転移門にしか戻って来れない。しかし、回廊結晶は出口を自分で指定でき、自分の好きな場所に移動できる優れものだ。その分、回廊結晶は転移結晶とは比べ物にならないほど高価なのだ。

「あるギルドのリーダーから、これであんたらを黒鉄宮の牢獄に入

れてくれと依頼を受けてな。あとは《軍》が面倒見てくれるさ。コリドーオープン！」

キリトが叫ぶと、瞬時に結晶が砕け散り、その前の空間に青い光の渦が出現する。

オレンジプレイヤーたちが、ある者は毒づきながら、ある者は無言で光の中へ飛び込んでいった。盗聴役のグリーンプレイヤーもそれに続き、ロザリア一人が残るだけとなった。

だが彼女は一向に動く気配を見せず、それどころか挑戦的な視線を投げかけてきた。

「・・・やりたきゃ、やってみなよ。グリーンのアタシに傷をつけたら、今度はあんたがオレンジに・・・」

「オレンジに、って別に傷つけなくても、つかんで投げ飛ばせばいいだけの話だろ？というわけで、よろしくクロノ」

「俺かよ！」

システムの、ダメージを与えなければいいだけなのだ。それなら、ただ単にそこまで引っ張っていけばそれですむ。言っというて自分でやらない理由は別にあるんだが。

「フ、舐めるなよクロノ。俺の筋力値は、武器と防具が装備できるギリギリのラインまでしかないからな。よって、俺ではこいつを動かせん」

「それ、自慢でもなんでもないぞ・・・」

キリトがぶつくさ言いながらも、ロザリアの襟首をつかんで回廊の

方へ歩いていく。ロザリアは最後のまで抗っていたが、キリトが力任せに回廊に放り込むと、その姿は消えていった。

「それで、クロノ。結局何があつたんだ？」

「うーん、どこから話せばいいんだ？ほら、昨日レイトと別れた後・
・。」

「あ、ちょっと待ってろ」

話し始めようとしていたキリトを制して、シリカをこっちに呼ぶ。彼女が来ると、キリトが聞いてきた。

「その子は？」

「今回の一番の被害者。クロノ、彼女はシリカ。まあ色々あつて俺とパーティを組んでる。さっきのオレンジたちに目をつけられていたのもシリカだし」

次に、シリカのほうを向いて言う。

「シリカ、この全身黒いのがクロノ・じゃなくてキリト。攻略組の一人だ」

「初めまして、キリトさん」

「全身黒いのってな・・・まあ、よろしくシリカ」

二人の自己紹介が終わるとキリトが話の続きを話し始めた。

「簡単にまとめると、さっきのオレンジ達がギルド襲って、その仇討ちをお前が引き受けた、ってことでいいか？」

「そんなところだ。とりあえず悪かったな、レイト」

キリトが頭を下げてる。そんな頭下げられるようなことはしてないんだが・・・

「謝るなら俺じゃなくてシリカにだろ。俺のほうは貸しーでいいから」

「あ、いえ、大丈夫です。レイトさんが全部片付けてくれましたし」

それでこの話は打ち切りになった。キリトは依頼者に報告してくると言って帰っていった。キリトの姿が見えなくなると、シリカが話しかけてきた。

「レイトさん、ありがとう」

「いや、だからそんな礼を言われるようなことはしてないって。それよりも、早く街に戻ってピナ蘇生させなくていいのか？」

それを指摘すると、シリカはそのことをすっかり忘れていたようで、あ、と声を出した。

「そうでした！早く戻りましょう！」

シリカは俺の腕をいきなり引っ張り、凄い勢いで街への道を走り始めた。すると、さっきも言ったとおりこの装備ができるギリギリの筋力値しかない俺は、なすすべも無くシリカに引っ張られるわけで

かなり変な体制のまま全力疾走することになった。
それから、十数分くらい経って俺たちは35層の《風見鶏亭》に戻
ってきていた。

「足がつる……」

全力疾走を終えた俺はベットに突っ伏していた。システムのこの
世界では息切れなどは起こらないが、それはこの世界の体のことで、
今も眠り続けている現実世界の体は心拍数は上がっていることだろ
う。

「す、すいません……」

シリカも宿について、やっと俺を引つ張って走っているということ
に気づいた。やはり、ピナの事で頭がいっぱいだったのだろうが。

「いいから、いいから。それより、さっさとピナ蘇生してやりな」

体勢を直して、ベッドの縁に座りなおす。

シリカが花の滴をピナの心に振りかけると、羽が光りはじめた。光
はだんだん大きくなっていき、シリカの両手ぐらいの大きさになる
と、ひととき強く光り、中から水色のフワフワとした小竜が現れた。

「ピナ……!」

シリカが再び会えた自分の使い魔をギュッと抱きしめる。蘇生は成
功したようだった。

ピナの容姿を見るに、種族名フェザリドラだろう。元々出る確率も低く、エンカ
ウトするだけでも大変なはずなのだが、それをタイムできたシリ
カの幸運にも俺は驚いていた。

「とりあえず、おめでとう」

俺が声をかけるとシリカはありがとうございます、と元気よく返したのだが、その直後、何かに気づいたかのように口を閉じてしまった。

「どうかしたか？」

「あの・・・レイトさん・・・行っちゃうんですか？」

「行く・・・？ああ、最前線に戻るって事？まだ戻らないよ」

よっぽど俺の答えが意外だったのか、シリカはぽかんと口を開けてしまった。

「え？攻略に戻らなくてもいいんですか？」

「うーん、不謹慎だとは思っただけど、はつきり言って俺攻略にあんまり興味ないんだよね」

シリカは俺の意図がつかめていないようで、首をひねっている。

「前に言ったかもしれないけど、俺は楽しむことを第一に考えてるからな。だからこう、毎日最前線でひたすらレベル上げるのは、性に合わないというか」

「じゃあ、まだここにいますか？」

「明日からは、ここよりもっと下に行くぞ？やりたいことがまだ結

構残ってるから、最前線に顔出すのは結構後になると思う」

そこで、一回話を切り、もう一度話し始める。

「そこで相談なんだけど、シリカって明日から暇？」

「え？私ですか・・・？特に用事はありませんけど・・・」

「もしよかったら、明日からもパーティ組まないか？」

「私とですか！？」

驚いているシリカに俺は頷きを返し、続ける。

「パーティ専用クエストも結構たまってるし、そのピナにも興味あるし。もし、シリカがよかったらだけど」

「お願いします！！」

少しは悩むかと思っていたのだが、シリカからの答えは即答だった。

「いいのか？強制はしないけど・・・？」

「大丈夫です！こちらこそよろしくお願いします！！」

またも即答だった。それにさっきに比べてかなり嬉しそうにしているのが分かった。

まあ、シリカが良いというんだったらいいのだろう。

俺はシリカに向って、手を出した。

「これから、よろしく」

長かった一日の終わり（後書き）

やっと、黒の剣士が終わった・・・
次からオリ話が多々入ると思います。
これからが書きたかったこと
なので。
感想とか待ってます！！

くじ引きと槍と（前書き）

オリ話に入りました！

こっちの方がすらすら書けるという・・・。

今回は前置きみたいなものです。

では、どうぞ！

くじ引きと槍と

「こっちは準備できましたー！」

シリカの声を聞いて、俺も目の前にあるスイッチに手を置く。

「押すぞー、せーの！」

スイッチに力を入れると、がこんと音がして地面に埋まっていく。これでここも終わりか。

初めてシリカとパーティを組んでから、もう一週間が経った。

今日、俺はシリカとあるクエストをするために1層に來ている。

クエストとは、ここ1層の東西南北に設置されたスイッチを押す、という単純かつ簡単なもの。なのだが、各場所に2つあるスイッチを同時に押さなければならないという内容のため、パーティクエストとなってる。

報酬は結構1層でもらえる物にしてはいい物なのだが、ある理由から余りこのクエストはプレイヤー達には人気ではない。

「よし、これで三つ目終了か。後一つだな」

俺とシリカは東から始めて、北を通って今西の物を終わらせていた。

「後、南でおしまいですね。でも、皆がやりたがらない理由がよく分かりましたよ」

シリカが苦笑しながらこっちまで戻ってきた。

このクエストが人気ではない理由、それはこの層の広さにある。この層の直径はおよそ十キロメートルもあるため、とても時間がかか

るのだ。それに加えて、その距離をモンスターと戦闘しながら進まなければいけないのである。更に一人ではクリアできないという不便さもあって、このクエストは不人気なのだ。

「まあ、距離が距離だからな……。この世界では歩き続けても疲れることが無いけど、それを差し引いてもあまり進んでやりたいと思うやつはいないだろ」

「確かに、初心者がやるなら赤字覚悟しないとイケませんよね……」

肩に乗っているピナをなでながら、シリカは呟いた。
さてと次の場所に行き……と。

「シリカ、前方から敵。数は3」

索敵スキルに引っかけた情報をシリカに伝えると、一応俺も腰から短剣を抜く。

少しして、モンスターが前方の草むらから飛び出てくる。そのままモンスターたちの射程に入る前に、短剣スキル《トライエッジ》を放つ。モンスターに飛んで行った3つの緑の衝撃波は、そのままモンスターをポリゴンへと変えた。

「レイトさんが全部片付けちゃうなら、私に伝えなくてもよかったんじゃないですか？」

短剣を仕舞うと、シリカから軽い非難の声が飛んできた。

「俺がやった方が早いし、情報は一応伝えといた方がいいだろ」

「それはそうですけど・・・」

「俺がいきなり武器抜いても警戒されるだろ。ほら、次のところに行くぞ」

シリカの頭をポンポンと叩いて、南に向って歩き出した。

それから、少し経ってシリカがふと思いついたかのように聞いてきた。

「そういえば、レイトさんってどこかギルド入ってたりしたんですか？」

「いや、俺はギルドに入った事もないし、これからも入る気はないけど。なんでそんなことを？」

いきなり聞いてきたシリカに問い返すと、シリカは首をかしげながら答えてくれた。

「レイトさんがパーティの役割をきちんとわかってたことに疑問を持ったんですよ。前にだれかとパーティを組んでたかみたいに連携がうまかったですし」

シリカにそれを言われた時、俺ははつとすると同時に胸がチクリと傷んだ。

「ああ・・・前にあるパーティには入ってたんだけど・・・」

あのパーティに俺が入っていた頃はこの世界で一番の楽しかった頃でもあり、それと同じくらいに一番辛い頃でもある。あの頃は・・・いや、これ以上は思い出さないほうがいい。

「ごめん。あのことは今は話せない・・・」

珍しく俺が言い淀んでいるのを見て、シリカはそれ以上深く聞いてきたりはしなかった。

「いいですよ。誰でも話したくないことの一つや二つはあるでしょうし。さ、早く行きましょう」

「ごめん・・・」

この話を切り上げてくれたシリカに感謝しながら、俺は歩き始めた。クエスト自体はそれから1時間程度で終わった。4つ目のスイッチを押し、始まりの町にいた依頼者にクエスト報告をしていた。

「おお、やってくれたか！これでこちらでも研究ができるわい。これは報酬だ、持って行ってくれ」

この依頼者というのがエギルもかくやという位のめちゃくちゃ体がゴツイおっさんなのだが、この体格で研究者とは・・・。いったい何を研究しているのか疑問に思ったが、話を切り上げ外に出る。外で先に終わらせて待っていたシリカに話しかける。

「シリカは何出た？」

このクエスト、基本報酬は確定ながらも、そのほかにランダムでアイテムが1つ出るのだ。一種のくじ引きの様なもので、初心者御用達の消費アイテムから、珍しいのでは中層あたりでも全然使える装備なども出ることがある。これがクエスト参加者全員に出るからうれしいところなのだ。

「私は、《月の欠片の指輪》でしたよ！」

「うそっ、マジで!？」

《月の欠片の指輪》は装備すると、体力が減っているとバトルヒーリングには及ばないものの、徐々に体力が回復するという永続回復ができるアイテムで、その他にもレベルアップ時に自分で振れるパラメータが1上がるといったおまけのような効果もついている。この指輪はこのクエストで出るアイテムの中でも、かなり確率が低かったはずだ。

「マジですよ、マジ。ほら！」

シリカはそういうと早速、指輪をオブジェクト化させて自分の指にはめた。俺は改めて、シリカの運の高さに驚かされた。

「むう、いいなあ」

「こればかりは運ですからね。レイトさんは何でした？」

うれしそうにピナとはしゃいでいるシリカを見ながら、俺もアイテム欄を確認してっと・・・。

「俺は《ウインドスピア》か。まあまあかな」

もらったのは武器の《ウインドスピア》。槍の一種でとても軽く、ほとんど筋力値が要らない槍だ。もらえるアイテムの中では中の上くらいの物だ。

「残念でしたね。レイトさん、槍使えませんし・・・」

「ま、貰える物はもらっておくさ」

アイテム欄を整理し終わり、閉じる。まあ、槍使える奴に渡してもいいし、エギルの店で換金してもいいしな。

「それじゃ、今日のところは解散に・・・」

クエストも終わったし、今日はこれで解散しようと言いかけた。しかし、そのとき一通のメッセージが届いた。

くじ引きと槍と（後書き）

《月の欠片の指輪》は強くしすぎたか・・・？
次から本格的に書いていきたいと思います。
感想とか待ってます！！

12層アノール（前書き）

18話目ですね。

FF13-2でホープが出るって分かって、テンションが上がっている作者ですww

今回はレイトの過去編です。

では、どうぞ！

12層アノール

――今から集まれませんか？――

突然来たメッセージには、そう書いてあった。

用件も書かないで送ってくるような奴なんて、あいつしかいないだろう。

「どうかしたんですか？」

俺の動きが止まったを不思議に思ったシリカが声をかけてきた。

「ん、いや、今メッセージが来てな・・・」

集まることに問題は無いのだが、シリカを連れて行くべきか。それが問題だった。

どうせここで解散しようと思っていたのだし、一人で行ってもいいのだが、今から言い出しても不信がられるだろう。少しの間無言で考え、

「シリカ、時間があればちょっと付き合っただけいいことがあるんだけど」

付き合っただけいいことがある、などとレイトにお願いされたのは今回が初めてだった。いつに無く真面目なレイトさんは、今までの私が知らなかった一面だった。

「分かりました」

私が返事をする、レイトさんはありがと、と小さく言ってから、素早くメッセージ打つと、中心街の方に歩き始めた。昔のことが関係しているのだろうか・・・？

疑問に思いつつも、私はレイトさんの後を追いかけた。

レイトさんがそのまま向ったのは、黒鉄宮だった。ここは、β版の頃はプレイヤーたちが蘇生される場所だったらしい。らしいというのは、私がβ版をやったことが無いから。

そこは、今では《生命の碑》と呼ばれている、このゲームでの生死を確かめる幅数十メートルもある岩が置かれている。

レイトさんは一度黒鉄宮の前で止まって、

「ここに嫌な思い出があるなら、ついてこなくてもいいぞ？」

すぐに私が首を振ると、レイトさんはそのまま中に入って行ってしまった。

少し遅れながら追いつくと、レイトさんは《生命の碑》の右側に座っていた。

私は脇にある柱でレイトさんを待つことにした。

「お待たせ」

数分たつと、レイトさんが戻ってきた。

「じゃ、行くか」

私の知らないことを話してもらえる事がうれしさと、今まで話さなかったことに触れてもいいのかという迷いがあった。

それを見抜かれたのか、

「別に大丈夫だぞ？シリカが聞いても。もう俺も克服はしたと思うし・・・」

「じゃあ・・・行ってもいいですか？」

「ん、分かった」

そのまま、レイトさんと内容が無いような話をしながら、転移門まで着いた。

そういえば、これから行く層を私は知らないことに気がついた。こんなこと前にもあったなあ・・・

「12層だけど、名前分かる？」

「12層ですか・・・？ちょっと覚えてないです」

そう言うのと前みたいにレイトさんは、腕を差し出してきた。それに掴まると、

「転移！アノール！」

転移独特の光に包まれて視界が変わる。一度真っ白になり、次の瞬間にはさっきまでとは違う景色が広がっていた。

転移して、まず、目に付いたのは城。どちらかという古城と呼ばれる感じの城が大きく聳え立っていた。今行ける層にはほとんど行っていた私だったが、この層に来たのは初めてだった。

「うーんと・・・」

隣でレイトさんが何かを思い出すようにうなっている。どうかしたんだろうか？

すぐ前にあるレンガの家に触れてみようと思えばいい、ん？なんか踏んだ？

「ちょ、待った！！」

レイトさんに腕を引っ張られる。その数秒後に目の前を矢が通過していった。ガツンと矢がさつきまで私がいたところに突き刺さっていた。

「間に合った……。全く面倒なところに……」

「い、今のなんですか！？」

街中で武器が飛んでくるなど聞いたことが無い。私が驚きながら尋ねると、レイトさんは困ったように

「アノールは通称、初見殺しの街と呼ばれているんだ……。今みたいに街中にトラップとか仕掛けられてて、街中じゃダメージは通んないけど、毒や麻痺なら効くからな。全く、こんなところを待ち合わせ場所にするなんて、ラウ姉の気持ちが見えない……」

ため息をつきながら教えてくれた……。

「ま、ここは一番人気が無い層だと思うよ。ここをホームタウンにする人はスリルを常に求めている人くらいじゃないか？」

あ、思い出した。12層って用事が無ければ絶対行くなって呼ばれ

てる層だっけ。道理で周りの人が少ない訳だ。あれ？なんか聞き覚えの無い名前をレイトさんが言ってた。これから会う人なのかな？

「大体のトラップは思い出したし、行きますか」

私は、歩き出したレイトさんの後を追うことにした。

「到着……」

疲れきったレイトさんの声を聞いて上を見上げると、一つの宿屋があった。

結局、私が二回麻痺に、レイトさんが一回防具の耐久度を下げる酸を食らった。レイトさんによれば、まだましな方だという……。

レイトさんと一緒に中に入ると、中は意外と広かった。隠れた名店のような、外から見たら余り気づかないが、中に入ると存在感があるような雰囲気だ。

レイトさんは1階の一番奥にある部屋に着くと、その部屋の扉をノックした。

「開いてますよー」

中から、のんびりとした女の人の声が聞こえてきた。

レイトさんがそのまま扉を開けると、今度はさっきよりはっきり声が聞こえた。

「お久しぶりですね、先輩」

12層アノール（後書き）

初見殺しでアノール、作者が今はまってるゲームが分かりますね。
あそこの大弓使いが厄介なんだよなあ・・・
感想とか待ってます！！

旧友とお菓子（前書き）

オリキャラ登場！！

なんか話が伸びてしまった・・・。

では、どうぞ！

旧友とお菓子

「お久しぶりですね、先輩」

中にいたのは、かつてのパーティメンバーだった少女。

「久しぶり、レナ」

すっかり物のお姉さん、目の前の彼女を一目見て判断すると、そんな感じだろう。身長は俺より頭一個小さく、この世界で唯一自分で容姿を変えられる髪を、水色のロングヘアーで伸ばしている。

「一体何の用だ？メッセージにもただ集まれとしか書いてなかっただろうが」

「集まれ、じゃなくて、集まれますか、ですよ。それじゃ、私が来るのを強制してるみたいじゃないですか」

「大差変わらんだろうが」

ひどいなーと言いながらも笑っている彼女は、昔からこういう細かいところでうるさい。それが、美点でもあり欠点でもあるのだが。

「立ち話もなんなんで、どうぞ」

レナが扉の前からどけて、中へと勧めてくる。レナの後に続きながら、扉を開けてから一言も喋っていないシリカを中に入れる。そうしてようやくレナがシリカに気づいたようだった。

「ええっ！先輩がかわいい女の子連れてる！！何時の間に！？」

「やっと気づいたのか。お前はいつも周囲の状況判断が・・・」

「先輩。犯罪はいけませんよ、こういうのは両者の同意があつてこそ・・・」

「違うからな！！今の俺のパーティメンバーだから！」

レナいつもの応酬をする。こういうのもほんとに久しぶりだな・・・。

「なぐんだ、早く言うてくださいよ。だから先輩は・・・」

「お前の勘違いだろうが。ちょっとは話を聞け」

「でも、先輩がパーティねえ……。で、彼女は？」

今までの応酬についていけなくて、固まっていたシリカに向き直る。

「彼女はシリカ。さっきも言ったが俺の今のパーティメンバーだ。メンバーって言うても、俺とシリカしかないけどな」

俺は《今の》というところを強調して言った。

「シリカちゃんか、よろしくね！こんな先輩だけど根はいい人だと思つ・・・から」

「おい、何だその間は！さらに思うだけかよ！」

ここでやつと処理が追いついたシリカがはじめて口を開いた。

「あ、えっと、よろしくお願いします。あの、レナさん？」

「私の名前はセレーナ。先輩が言ってるようにレナでいいよ！あと、敬語も私には付けなくていいよ〜」

「そうだぞ、こいつに敬うところなんて無いから」

「ちょ、先輩、ひどい！少しは後輩に対する優しさって物があっても」
レナの説明に茶々を入れつつ、話を元に戻そうとするが・・・

「いやー、同年代の同姓って中々いないからね。シリカちゃんは歳幾つ？」

「14ですけど。レナさんは？」

「私は15だよ。そだ、フレンド登録しようか！」

等と女子二人で盛り上がってしまっ、どうにも戻りそうに無い。
というか、話に混ざれない・・・。

しばらく混ざれそうにないので、俺はキッチンで何か作ることにした。

「なんか、菓子でも作ってくるからなー」

調理台に向かって何を作るか考える。短時間で作れて、簡単に腹に入るものとなると・・・よし、決めた。材料は、《リトルリザードの爪》と《エクトホーンの粉》に・・・あれが足りないか。

雑談している二人の元に戻り、レナに声をかける。

「レナ、倉庫に《虹彩放つ羽根》ないか？」

「《虹彩放つ羽根》？ あったと思うよ、ちょっと待ってて」

レナが倉庫にある方へと歩いていく。あれが無いと、何で代用するかな・・・

「そんな素材何に使うんですか？」

シリカが聞いてきた。まあ、羽は普通の素材アイテムだしな。

「何って、調味料。甘さを出すにはあれが一番だと思うんだけど」

「甘さって・・・素材に味があるんですか？」

「基本的に素材には全部味有るぞ？ 見た目が見た目なのは食べたこと無いけど・・・。ちゃんとした食材アイテムじゃないから、それらで作ってもスキル値は上がらないけどな」

自慢じゃないが、素材アイテムはほとんどのものを食べたことがある。ある程度は自分でも記憶しているし、今欲しい甘味は分かる。

「あつたよー。私たちの分もお願いしますね、先輩」

シリカと話し込んでいると、レナが戻ってきた。彼女から材料を受け取り、レナに手を上げてながらキッチンに戻る。

まずは、爪を刷って・・・それに粉を塗して・・・それで・・・5分位して、目当てのものができた。見た目も悪くないし、我々が

らしい出来だと思う。

簡単に皿に盛り付け、二人のところへ戻る。

「完成したぞ」

「ありがとです、先輩！さすが私たちの中で唯一、料理スキル持ってただけありますね」

すぐにレナが待つてましたとばかりに食いついてきた。

「まあ、色々作られたからな。俺が作れないようなものまで、簡単に要求されたしな」

興味単位で作ってみたらくよくできたから、レナにも渡そうと思ってここに持ってきたのがそもその原因だったような。結局、いいほうに転んだからよかったけどさ・・・

「それはご愁傷様です。で、なに作ったんですか？」

「クッキーだ。短時間で作れるもので、俺が一番得意としているのはこれだったからな」

「ふえ！？クッキーですか？」

シリカも興味津々になって聞いてきた。現実世界では身近にあったお菓子だけど、この世界では食べれないものだしな。

俺は、手にしていた皿をテーブルに置いて、さらにアイテム欄にストックしてる飲み物を数種類出す。

「さて、召し上がれ。飲み物は好きなの飲んでくれ」

俺たちは簡単なお茶会を始めた。

旧友とお菓子（後書き）

書き始めた頃は、レイトをこんなに料理上手にする気はなかったんだけどな・・・？

次からレイトの過去に触れていきます。
感想とか待ってます！！

過去の天災（前書き）

ゲームやらアニメやらでこのごろ全く書けませんでした・・・
今回はレイトの過去について。
では、どうぞ！

過去の天災

「二人って、どこで出会ったんですか？」

お茶会の途中でシリカが聞いてきた。

「《藍椿》だよ。シリカちゃん」

「藍椿・・・？」

「って、先輩から何も聞いてないの？」

シリカとレナから別々の視線を向けられる。まあ、今日の目的はそれだしな。

「ここで話そうと思ってな。レナだって、知り合い全員に教えてるわけじゃないだろう？」

「そりゃそうですね。先輩がパーティ組んでたから、つい・・・」

「ま、それもそうか。俺が説明するから、抜けてるところあったら付け足してくれ」

「りょーかいです」

シリカも、興味を示してくれたところで、俺は話し始めた。

「藍椿は、俺が前に入っていたパーティで・・・」

藍椿はここアノールを拠点に、ある日突然結成されたパーティで、俺やレナもそこに入っていた。今思い返せば、いつも、リーダーだった彼女に振り回されていたが、不思議と向けたと思ったことは一度も無かったな。

「へえ、いいギルドだったんですね」

「違う違う。藍椿はギルドじゃないんだよー」

「一応、それが俺らの活動目標だったしな」

藍椿はギルドではない。パーティの結成理由が、ギルドに負けないパーティを作る、というものだったからだ。

「実際、ギルドになった方が色々楽でしたけどね」

「それは暗黙の了解だったし。それに、俺らが言ったところでラウ姉は折れないだろ」

「ああ、確かに」

「ラウ姉って誰ですか？」

俺らが苦笑しながら言うと、シリカは聞いたことが無い人名に引っかけたのか、聞いてきた。

「ラウ姉は、………天災かな」

シリカの頭の上に？が出るのと、レナが思わず吹き出したのはほぼ同時だった。

「天・災・・・？天才じゃなくてですか・・・？」

「確かに、ラウ姉は天災でしたね」

藍椿のリーダーにして、無茶難題の提案者、それがラウ姉だった。いつも、常人からは考えられないような事を提案しては、周りの意見も聞かずに実行に移す。さっきも言ったように彼女は本当に天災そのものだっただ。

「嵐の様な人だったよな・・・」

「リオンさんがいなかったら、どうなってたんでしょね・・・？」

リオンは唯一ラウ姉を止める事ができる人だった。ラウ姉の彼氏にして、ストッパー。俺らからすれば、いつも頼れる兄の様な存在だった。たまに、ラウ姉の提案に悪乗りして止められなくなったこともあったが。

「考えたくは無いな・・・」

あの天災を止められる人がいなかったと思うと、正直ゾットする。それほど、ラウ姉は俺に深い影響を与えていた。

「4人が全員いて、うまく回ってましたからねー」

「4人？」

「うまく回っていたかどうかは別として、藍椿は俺ら4人だけだったんだよ」

「え、たった4人で・・・？」

藍椿では一人一人が自分得意なことを生かして、うまく回っていた。ラウ姉がすることを決め、俺がそれをするために作戦を立てる。そして、リオンさんが戦場でも指揮を執り、レナがその場その場でアイテムをうまく使って皆を援護する。これが藍椿での役割分担だった。

「たった4人で、凄いですね・・・」

「実際かなりギリギリなところも結構あったしな」

体力がイエローゾーンに陥ることは日常茶飯事、時には自分たちの部位破壊も普通にやった。無茶してばかりのパーティだったが、実際、無茶に付き合っているのが楽しかったのもある。

「あれ・・・どこかで藍椿って聞いたことがあるような・・・」

まあ、悪名に近いものも結構立てた気がするから、どこかで聞いたこともあったか。

「それにしても、よく先輩がパーティ組みましたよね」

話がひと段落すると、今度はレナが話しかけてきた。

「俺のは成り行きだ。そのピナ、その小竜だが、その蘇生を手伝ってから組むようになってな」

「でも、それだけで先輩が組み続けるとは思わないんですが？もし

かして、好きになっちゃいました？」

さすが、昔組んでただけのことはある。嘘は通じないか。

「お前と前に会った後に、少し秘密ができてな。それを見られたからだよ」

「秘密？今話すって事は、私にも教えてくれるんですよね。あと、さっきのはスルーですか？」

無視無視。まあ、秘密の方は話すけどな。

「あ！」

突然シリカは飛び上がると、俺の方を指差した。

「藍椿ってあの、不思議なメッセージじゃないですか！」

不思議なメッセージ？レナの方を向いてみるが、彼女も分からないらしく、首をかしげている。

「24層のボス部屋に書いてあった、あのメッセージですよ！！」

過去の天災（後書き）

長くなりそうだったので、ここで一回切ります。

ラウ姉のイメージとしては、ISの天災とさくら荘の宇宙人を混ぜたような感じです。さすがに分かるとは思います。感想とか待ってます！！

藍椿（前書き）

レイトの過去、後編（？）です。

立てる気はなかったのだが、あの人の生存フラグを立ててしまった・

・

では、どうぞ！

藍椿

「メッセージねえ・・・」

そんな堂々と証拠残すようなこと藍椿でやったか？いや、表に出せないようなことはしてないが。

結局、何のことか分からなかったので、シリカに続きを促す。

「10層で攻略組が苦戦してたボスが、いつの間にか消えていて、《藍椿参上！！》ってメッセージだけが残ってたって話なんですけど・・・」

10層？えーと、あ、あれの事か。

「やったな、そんなこと」

「やりましたね、そんなこと」

俺とレナがほぼ同時に呟いた。あれはボス撃破より、その後の11層での出来事の方が酷かったから、すっかり忘れてた。

「確かラウ姉が、11層ってアイングラット10分の1達成地点だよねー、だったら藍椿が一番乗りしようとか言ったのから始まったんでしたっけ？」

「そうだったな、それから結局、一番乗りするにはボス撃破しかないって話になって・・・」

「その後、10分くらいで簡単な作戦決めて・・・」

「後はいつもの、《問題点はその場で何とかする》でゴリ押しした
んだったよな」

少しくらい不安残した方が楽しいよ、というのが彼女の口癖だった。
そのおかげで、藍椿では深々と作戦を立てず、何か起こったらその
とき考える。という方針をしていた。

「え・・・？ たった4人でボス倒しちゃったんですか！？」

「そうだよ」。先輩が今着ているローブは、そのときにドロップし
た物ですよな？」

「ああ。んで、そのメッセージは終わった後にラウ姉が書いたもの
だと思う」

シリカは心底驚いているようだが、これは、藍椿の中ではまだ軽い
方だ。

「それで、ここが藍椿の集会所だったって訳」

この場所は藍椿のホームで、倉庫や金庫もここにある。毎回ここに
来るたびにトラップの迎撃されるのには苦労させられたが。

「レイトさんは今でも藍椿で活動しているんですか？」

レナが息を詰めるのが分かった。俺は何でもないように答える。

「してない。ラウ姉たちがいないからな」

「え？それって・・・？」

実感がわかない。俺はその瞬間を見ていたはずだ。なのに、それが信じられない。

俺が黙り込んだのを見て、口を開こうとしたレナを制して、俺は吐き出した。

「死んだよ、ふたりとも」

「っ！」

そうだ、その彼女たちはいない。その事実を認めたくない。だが、俺は続ける。

「たまたま、最前線に上がって来ててな。そこで、他のパーティを庇って死んだんだ」

あの時、俺にもっと力があれば……。何度もそう思う。それ以来俺は、自分の無力さを呪い、一度もパーティには入りはしなかった。ひたすらソロでレベルを上げ、攻略組に登りつめるまでになった。今では元の考えに戻ったものの、それでもあの日のことは忘れたことが無い。

「それにしても、よく立ち直りましたね。先輩」

「ま、レベルだけ上げてても、楽しめないって分かったからな」

あの事件以来、ほとんど忘れかけていた《楽しむ》という行為を思い出したのは、最前線で、ある少女を偶然助けた時だった。

「迷宮区で突然、近くでアラームトラップが鳴ってな。潰しに行こうと思って行ったら、成り行きでそこにいたパーティ助けたんだ。助けたと言っても、何人かは間に合わなかったけど……。それでも、終わった後、ラウ姉のこと思い出してさ。それで、今の自分は何やってるんだって思って、そこで立ち直れた」

本当に偶然の出来事だった。あれが無かったら、俺は一年間あのままだったかもしれない。そう考えると、不謹慎だがあれには感謝している。

「よし、ここでこの話はやめ。最初の目的に戻ろうか」

一度手をパンと鳴らして、場の雰囲気を打ち切る。もうこの話はこれくらいでいい。

「レナ、俺を呼んだからには、何か理由があるんだろ？」

「あ、そうでした。つい昔話に花が咲いてしまいましたね」

レナは俺に向き直ると、壁に立てかけてあった槍を掴んで、

「久しぶりに、決闘^{デュエル}してくれませんか？」

にこやかに笑いながら言った。

藍椿（後書き）

次回はデュエルです。

ただ単に銃での戦闘がしたかったただけなんですけど。
感想とか待ってます！！

秘密と戦闘と（前書き）

累計PV 111,136アクセス

ユニーク 19,600人

本当にありがとうございます！！

いつの間にこんなになっていたのやら・・・

今回は予告どおりデュエルです。

では、どうぞ！

秘密と戦闘と

「で、何でいきなり決闘デュエルなんだ？」

場所は変わって、アノールの広間。広間といっても、トラップがほとんどのないエリアなのだが。

「そろそろ先輩に勝てるかなーと思ひまして。先輩、そのロープまだ着けてるってことは、敏捷力特価のままですよな？」

「まあな、これが俺が藍椿にいたところの記録だからな。別にこれに守備力不足を感じてる訳でもなし」

それに、あのころとは武器も性格も変わった。まあ、変わったのは俺だけではないということか。

それにしても、レナが挑発とはな。昔からは考えられないほど変わったな。

「さて、お前の挑発に乗ってやる。ついでにさっき言ってた秘密も教えてやるよ」

アイテム欄を出し・・・今回は銃衝術のほうでいいか。双銃を装備、選択スキルを変更して準備終了。

両手に重みが加わったのを確認して、戦闘衣の裾からレナに双銃を見せる。

「エクストラスキル《銃火器》派生、《銃衝術》だ。エクストラスキルといっても、ユニークだけだな。この世界の世界観を崩す、俺

の切り札だ。出現方法は知ってるが、聞いても無理だから教えん」

「銃、ですか・・・確かに反則級のスキルでしょうけど、それでも勝てる自信はありますよ」

「まあ、やってみな」

メニューウィンドウから決闘^{デュエル}を選択してレナに送信。当然、初撃決着モードになって受託される。二人の間に開始のカウントダウンが表示される。

「シリカはもう少し下がってた方がいいぞ」

「あれ先輩、余裕みたいですね？」

シリカがちゃんと下がったのを確認してから、レナに向き直る。

「そんな事言つといて、一撃で終わるなよ？」

「大丈夫ですって、先輩くらい軽く倒せますから」

カウントダウンは進んでいくが、俺らは軽口をたたきあう。これも藍椿では普通だった。ローツで相手の集中が切れてくれれば儲けもん。これはリオンさんの常套句だった。おしゃべりくらいで集中が切れるほうが悪いし、それを理由にするなんてみっともない。

「ハンデでもつけてやろうか？」

「それはこっちの台詞ですよ」

表面こそ言い合っているものの、俺はもう言葉は頭に入ってきていない。見ているのはカウントダウンの数字だけ。多分、レナもそうだろう。

「さて・・・始めるか」

先に動いたのは俺だった。開始と同時に双銃の引き金を引く。狙いは特に定めず、牽制目的に広範囲に銃弾をばら撒く。

レナはそれを横にステップで回避するが、数発が被弾しHPバーが軽く削れる。

次に動いたのはレナ。俺に向って一直線の突進。敏捷力特化でないものの、高レベルであることを示すような速さで突っ込んできた。

当然、俺は銃弾の雨を浴びせる。

だが、銃弾がレナに当たる寸前、レナの姿が掻き消えた。

「なっ!?!」

すぐに索敵スキルを発動、位置を捕捉。上!

だが、ここまでにかかった数秒。その大きな隙をレナが逃すはずがない。

「せえええええい!」

槍を振りかぶったレナが、落下速度共に接近してくる。大上段に構えられた槍にはエフェクト光に包まれていた。ソードスキル付きか! もう回避は不可能な距離。とっさに双銃を交差させ、ガードの構えを作る。

キィインと金属同士が打ち合う音が響いた。レナの槍を双銃で受け止める形で二人の動きが止る。

「あれ、一撃で終わると思ったんですけどね」

「そんな簡単に負けたら、ユニークスキルの名が廃るだろうが」

とはいえ、レナのソードスキルも上位スキルだったらしく、俺のHPバーも三割がもっていかれた。

先にレナが離れ、後ろに下がる。だが、そのまま俺は追走し、レナとの距離を狭める。

このまま距離を開けられたら、またさっきの二の舞だろう。だったら接近戦に持ち込む。それに槍はリーチ、威力共に申し分無いものの、槍が十分振るえない距離まで近づかれるのに弱い。そこからはほぼ密着した距離での接近戦になる。

「久しぶりだなっ、と、こんな、にも、打ち合うのはっ」

「それっ、には、同感、ですっ」

俺の銃がレナの槍を弾き、槍が銃の刃を受け止める。

永遠に続くかと思われた打ち合いだが、何度も打ち合っていくうちに、両者に差が開き始めた。レナの槍が一本なのに対し、俺は双銃。ましてや、レナは十分に振るえない距離であるうえに、敏捷値は俺の方が高いため、引き離せない。

徐々にレナのHPは削れていく。だがレナも俺の小さな隙を見つけ、では、確実に攻撃を当てていく。

俺のHPが六割を切ったところで、俺が動いた。このまま行くと負ける。だったら、これに賭ける！

レナの隙を見つけ、左の手首を捻り、右手を腰だめに構える。双銃がエフェクト光を纏い、ソードスキルの開始を告げる。

左の銃で下から斜めに切り上げる。が、これは槍に防がれる。その直後、右の銃での突きが槍にぶつかり、レナの体制が崩れる。先の

切り上げの推進力を殺さず、そのまま横に回転して、左で横からの一撃。そこから右での大上段からの降り降ろし。最後に今度は左での突きと共に銃撃を放ちフィニッシュ。

数少ない銃火器スキルの一つ、《ソニックバレット》。その五連撃はこの勝負を決するには十分なダメージを与えた。

俺の近くにウイナー表示が出て、そこで俺はやつと気をゆるめた。

秘密と戦闘と（後書き）

SAOのアニメの声優決まりましたねー

アスナさんはよかったんですけど、そのほかはうーんというか・・・
7月からなんで、まだまだ先の話ですけどね。
感想とか待ってます！！

気持ちと関係（前書き）

f f 1 3 - 2 に今はまっています！

謎解きが前と比べて多くなって難しい・・・

今回で一区切りつきます。

では、どうぞ！

気持ちと関係

「やっぱり卑怯ですよ、遠距離攻撃なんて」

決闘終了後、^{デュエル}レナが口を尖らせて言ってきた。

「はいはい、卑怯、汚いは敗者のたわごとだ。てか、俺を全否定してないか？」

俺の武器は銃以外では短剣と投剣。投剣は言わずともなく、短剣も衝撃波主体で使っている。つまり、俺の攻撃方法はほとんど遠距離攻撃なのだが・・・。

「あれ、気づきました？」

やはり気づいてやってたか。この確信犯め。

「自分の戦闘スタイルくらいは自覚してるつもりだが？」

「先輩、藍椿にいた頃は突撃もけっこうしてたじゃないですかー」

「そうなんですか？」

俺が近接攻撃をするのが意外なのか、シリカはとても驚いている。そっぴや、シリカと組んでる時は衝撃波以外使ったことなかったか。

「あれは藍椿にいた時だけだ。藍椿のメンバーには遠距離攻撃だけじゃ勝てないからな」

目の前にいるレナはともかく、ラウ姉とリオンさん相手では絶対無理だ。パラメータの問題ではなく、彼女たちは一筋縄じゃないかなかった。

「あー、確かに。私リオンさんには一回も勝てなかったもんねー」

「あの人は堅すぎるんだよ・・・盾持ちじゃないのにどうしてかこっちの攻撃入んないし」

俺もリオンさんに勝った事はない。引き分けなら一度だけしたが、あれは運がよかっただけだった。

「え？レイトさんが勝てなかったんですか？」

「ま、上には上がいるのさ」

そう言いながら、双銃を仕舞い、武器を元に戻す。武器を変えるときに一々使用スキルを変更しないといけないのは、どうにかならないものか。

今度相談してみるか・・・。

「満足したか？レナ」

「はい、ばっちりです」

礼儀正しくお辞儀をしてくる。こついうところだけは妙に律儀というか、なんというか。

そついえば、部屋はまだ大丈夫だったけか？

「そろそろ、期限切れるよな？」

「あー、そう言われてみれば、そうですねー」

「今回は俺が払つとくわ。そろそろ時間だし、今日はここでお開きでいいか？」

「わ、もうこんな時間。そうですね、ここで解散しましょうか」

レナも頷くと、自分の得物を背中に背負った。

「それじゃここで。今日はありがとうございました」

「はいよ、また今度な」

簡単にあいさつをしてから、レナは転移門のほうへ歩いていった。しかし、途中で一回止まってこっちを向くと、

「せんぱーい、かわいい彼女なんですから泣かせちゃダメですよー」

爆弾を落として、今度はそのまま帰っていった。

俺とシリカの間に、気まずい雰囲気流れる。レナめ、今度会ったら許さんぞ・・・。

「あつ、あの、さっきの最後の会話ってなんだったんですか？」

シリカが強引に話題を変えてくる。俺は彼女に感謝しながら、シリカに聞かせる。

「期限っていうのは、あの部屋の期限のこと。ギルドホームじゃな

くて、宿の一室をずっと借りてるから定期的にコル払つとかないといけないからな。あと、レナは自分の店の開店時間がそろそろだから先に帰ったって訳」

「レナさん、お店持ってたんですか。凄いですね・・・」

しかし会話は長く続かず、また元の雰囲気流れる。はあ、と俺は心の中で溜息をついているとシリカが今度はさっきとは口調を変えて聞いてきた。

「さっきのことなんですけど・・・」

「別に気にしないでいいぞ、さっきのはレナが勝手に」

とここまで言ったところで、シリカに袖を引っ張られる。

「あの・・・わたしじゃ・・・いやですか・・・？」

最後の方は、小さくなってほとんど聞こえなかった。だが、彼女が何を言おうとしているのかは分かった。

もう俺も自分の気持ちも自覚していた。あの時、なぜ出合ったばかりの彼女を助けたのか。そしてそれ以来ずっと組み続けているのか。

「いやじゃない」

「え・・・？」

だから、俺は俺の偽りのない気持ちを直接言っつ。

「俺はシリカのが好きだ。シリカの気持ちを教えてくれ」

告白。一気に心が落ち着かなくなる。

俺はじつと次のシリカの言葉を待った。それは1秒が数十分になるように感じた。

「私も・・・レイトさんのことが好きです」

シリカはこちらの目を見て、恥ずかしそうに答えた。

さっきとは違う沈黙が流れる。次に沈黙を破ったのは、俺だった。

「えーと、じゃあ・・・これからよろしく」

今の場にはそぐわない言葉なのだろうが、これが俺の精一杯だ。

「はいっ」

ある日突然狂ってしまったゲームの中で、少年と少女が結ばれた瞬間だった。

気持ちと関係（後書き）

こついうのを書くのは難しい・・・

もうここでの二人はくつつけてみました。

次はやつと一巻・・・とその前に藍椿の活動をちよつと載せたいと思います。

感想とか色々待ってます！！

EX 藍椿のボス攻略・前編（前書き）

グラビトンコアが見つからねえ！！

あれは絶対攻略本無しでは詰まるゲームだと思う・・・。
そういえば、今日ってクリスマスなんですよね。

今回は藍椿での活動です。

一話にまとめようと思ったのに、かなり長くなりそうだったので前編にしました。

では、どうぞ！

EX 藍椿のボス攻略・前編

「やっと、着いた……」

目の前に見えた宿を見つけて、俺は息をついた。
なぜ、こんなにも俺は疲れているのか？
理由は簡単、朝早くから一通のメッセージが来たからだ。

- - - 藍椿メンバー全員集合！！7時には絶対到着してね - by
ラウ - -

このメッセージが届いたのが6時15分。更に面倒なことに、添付されていた地図を見ると、10層の転移門がある主街区から最も遠い町の端にある宿。

必死に走って、やっと着いたところだった。

中に入り、一番奥の部屋に向う。藍椿では、というよりラウは宿を取る時、一番奥の部屋にするのだ。いい宿があったとしても、一番奥の部屋が開いてなければ別のところにするらしい。

視界の右端に集中すると、時刻は6時57分を指していた。

「後3分か……間に合った」

ホツとしながら、部屋の扉を開ける。と、扉の向こうから何かが飛来してきたのが目に入った。

「っ!!」

体を無理やりひねり、飛来してきた物体をギリギリでかわす。物体

はそのまま後ろの壁に突き刺さった。

「何してんですか！リオンさん！？」

後ろに突き刺さっているのは、一振りの大きな鎌だった。これは藍椿のメンバーの一人リオンが愛用している得物だった。

「俺じゃない、ラウの方だ」

中から出てきたのは、長身の青年。すらりとした体格と顔つきは好青年を思わせる。リオンだ。

「レイ君、おはようなんだよ！！！」

中に入ると、元気よく声をかけてくる先ほどの原因。彼女も容姿だけを見れば、美少女の分類に入るだろう。容姿だけを見れば、だが。

「ラウ姉、今はあいさつはどうでもいいです。さっきのは何なんですか！？」

「うむ、レイ君。こういう言葉を知っているかね？」

目の前で腕を組んでいる彼女こそ、藍椿のリーダー兼提案者のラウだ。俺やレナからはラウ姉と呼ばれている。

「何事も5分前行動は絶対なんだよ！」

「間に合うか！！！！！！」

「うるさい」

鎌を壁から抜いて戻ってきたリオンに叩かれる。そのまま彼は部屋の端の椅子に座った。どうやら、睡眠不足らしく、もう一眠りするらしい。

全くを持ってラウの考えは分らない。天才を超えた天災、それがレイトがラウに持っている印象だった。

「で、今日は何をするんですか？」

ラウが招集をかけたということは、藍椿で活動をするということだ。気を取り直して、ラウに聞いてみるとまたしても変則的な答えが返ってきた。

「レイ君、レイ君！ここって10層だね？」

「はい？いきなりなんですか？」

正直嫌な予感しかない。

「てことは、11層はアインクラッドの十分の一って事だね？」

「まあ、そうなりますね」

「だったら、11層には藍椿が一番乗りしようよ！！」

「は・・・？」

確か、今の最前線がここ10層だったはずだ。つまり、11層はまだアクティベートされていないわけで・・・。
かすかな希望にかけて、俺は聞いてみた。

「えっと・・・それって、アクティベートされたら一番乗りするってことですよ？」

「何を言ってるんだいレイ君！私たちが一番乗りしなきゃ意味無いんだよ！」

何が意味ないのだろうか。今関係ないところに突っ込みつつ、ラウが言っていることを理解したくないが、理解してしまう。

「ボス戦俺らでやろうぜ！ってことだよレイト」

「ですよー・・・」

いつの間にか話に混ざってきたリオンの答えに、脱力しながら応える。

「ラウは一度言い出したら、曲がらんからな」

そういつて、何かを投げ渡してくる。見ると、10層のボスについての情報だった。

つまりリオンはそのことを事前に知っていたことになる。

「その労力をラウ姉を止める方に使ってほしかったんですけど・・・」

「ま、無理だな」

手をひらひらと返しながら答えるリオンに、またも脱力しつつ質問を続ける。

「他の攻略組に混ぜてもらうことは？」

「無理だろうな。あいつらは、これまでに二回攻略していて俺らはそれに加わってない。そこにこのこ出て行っても、入れてもらえんだろうよ。信用もされんし、何故今まで出てこなかったのかという非難の目までかけられるんじゃないか？」

「それもそうだ。この10層だけでなく、藍椿のメンバーは一度もボス戦に参加していない。攻略組に混ぜてもらうのは無理。」

「次に攻略組が動くまでの時間とかって分かりますか？」

「俺の推測でよければだが、少なくとも2、3日後にもう一度動くだろうな。もう十分あいつらも対策は立ててるだろう」

「そうですね・・・やっぱり今日動いちゃった方がいいですね」

「攻略組と鉢合わせるのも不味い、となるとなるべく早く動いた方がいいだろう。」

「後は任せたぜ、作戦参謀」

「そう言っただけで今度こそリオンは眠りに落ちてしまった。」

「すると、今度はラウが話し終わったのを見計らって話しかけてきた。」

「レイ君、できそう？」

「15分下さい、それでなんとか」

「10分だよ！」

「らじゃです！」

リオンから預かった資料に目を通していく。そこからメンバーでできる行動、戦法を探し脳内で検証。いくつかの基本方針を立てていく。

と、そこに

「遅れましたー」

藍椿最後のメンバーのレナが入ってきた。いいタイミングだ……。

「レナ、来てすぐで悪いが、ここに書いてあるの買えるだけ買ってきてくれ」

「レナちゃんは今回ヒーラー装備で行くの？」

「ええ、そうします」

ヒーラー装備とは作戦の一つで、藍椿で何回も活躍してきたものであり、攻略組には絶対真似できない作戦でも有る。

「分かりました！」

これも藍椿ではおなじみの光景で、レナも要領良く頷くと、すぐに俺が書いたメモを持って出て行く。

その後、俺は更に作戦をつめていく。敵の攻撃方法への対策、一人一人がその時点で何をすればいいのかの優先順位。有る程度大本の作戦が立ったあたりで、目標時間の10分は立ってしまった。

「それじゃあ、簡単に立てた今回の作戦ですが・・・」

藍椿作戦参謀は今回の作戦を語り始めた。

E X 藍椿のボス攻略・前編（後書き）

藍椿メンバー、うまく書けていたでしょうか？
感想とか色々待ってます！！

E X 藍椿のボス攻略・後編（前書き）

途轍もなく長くなってしまった・・・
25話、では、どうぞ！

EX 藍椿のボス攻略・後編

俺は昆虫型モンスター《ビーナイト》に向って投剣を投げつけた。投剣は相手の腹にあたり、ビーナイトをポリゴンの欠片へと変える。

「こっち片付きました！」

「先行って道中のモンスターの引き付け頼む！次の安全地帯前でそのまま待機！俺らが合流してから一気に殲滅する」

「了解」

藍椿のメンバーは10層迷宮区を疾走していた。リオンさんの指示に従い、先行してモンスターを引き付ける。

俺のすぐ後ろにはレナがついて来ていて、俺がひきつけ損なったモンスターの気を引いてくれている。

「レナ、大丈夫か？」

「この位ならなんとか。いざとなれば回避に徹しますので、そのときは先輩よろしくです」

藍椿のメンバーは4人でパーティを組んでいるものの、基本的には二人一組を二つ作るようにして動いている。この方が行動の範囲が広がるからだ。俺とレナ、ラウとリオンが組んでいることが多い。そして俺のパートナーのレナなのだが、今回はいつもとは違う装備で来ている。そのため、ついてこられるか心配だったのだが、問題ないようだ。

そうこうしている間に目的地点に到着。走るのをやめて後ろを振り

向くと、15体位のモンスターがこちらに向って走ってくる。

「レナは後ろに下がって俺の援護。自分に向かってきた奴は自分で何とかしろ」

「りょーかいです」

簡単に互いの行動を確認して、一番前を走ってきている敵に短剣で《トライエッジ》を放つと、その結果を見る前にモンスターの大軍の中に突っ込んだ。

ひたすらモンスターを攪乱し、確実に一匹一匹仕留めていく。攻撃も大ダメージになりそうなものだけ避け、それ以外は気にも留めず攻撃を続ける。

このままいくと後一分程度で俺の体力は切れるだろう。だがそれについての心配は微塵もしていない。

「お待たせしたよ！レイ君！」

こちらの援軍が到着する。ラウは軽装備でメイスを振り回しながら、俺の周りのモンスターを蹴散らしていく。大型スキルを発動し、一気に3体のモンスターを倒してしまう彼女はまさに災害である。スキルを使い終わり、ラウには数秒の硬直時間が発生してしまう。それを狙って迫ってきたモンスター達を更に横合いから弾き飛ばすもう一人の援軍、リオン。

「遅れて悪かったな、さっきの奴らを倒すのに時間がかかってしまった」

そう言いつつ、彼も得物の鎌を振り回し、モンスターの命を刈り取っていく。二人が加わったことで形成は簡単に逆転し、引っ張って

きたモンスターたちを殲滅するのにさほど時間はかからなかった。

「お疲れ様ですー」

レナが回復結晶を使い、全員の体力を回復させる。満タンまで回復したのを見てから、また移動を再開する。

もう迷宮区にはいつてから10分がたった。そろそろ着いてもいい頃なんだが……。

「あれだね！」

戦闘を進んでいたラウが声を上げる。敏捷力では俺>レナ＝ラウ>リオンの順だが、俺がしんがりをやっているため、ラウが一番前になった。

目の前に大きな扉が現れる。あれがボス部屋だろう。すぐに到達し、扉の前で一度止まる。

「それじゃ、ミッションスタート！」

ラウが扉に触れると、扉は自動的に開いた。そして中に入ったのは……。

「森？」

レナがポツリと呟いた。目の前に広がっているのは、まさしく森だった。周りは大樹で囲まれ、足場にも蔭が絡み付いている。かなり戦いにくい部屋だ。

「おっと、敵さんのお出ましのようだぜ？」

リオンの言葉につられて、上を見上げるとそこにいたのは大きな蜂だった。《The Queen Bee》、女王蜂、名前安直過ぎないか？

ギイイイイイイイイイイイ！！

女王蜂の金切り声で戦闘が始まった。

「レイトの作戦通りに動け！想定外の事があつたら、自分で何とかしろ！」

「了解！」「」

まず、何故このボスが手ごわいのか？それはいくつかの奴の行動にあった。

一つ、純粹に飛び回っているために攻撃が当てにくい。これはしょうがない事なので対策は特に立てていない。

「レイト！来たぞ！」

二つ、この部屋では一定時間経過すると、《デスビーナイツ》というモンスターをPOPする。これだけ見れば特に珍しくもないことなのだが、問題はその時間と数にあった。2分という短い時間で7匹もPOPするのだ。デスビーナイツは耐久、守備力共にとても低い。がしかし、それと引き換えに攻撃力は異様に高く設定されている。更にこいつらも飛び回るので、攻撃が当てにくい。つまり、こいつらは人海（？）戦術で確実に相手にダメージを与えていくのだ。

「《死の威嚇》！！」
ヘルハウル

これについてはきちんと対策も取ってある。まず、リオンが女王蜂もまとめて引きつける。余談だが、SAOではスキル名を口に出さなくてもスキルは発動できるのだが、挑発系のスキルだけは技名を口にしないと発動できないらしい。その間に、

「——っふ！」

短剣上位スキル《ファルコンスラッシュ》を発動。7連撃の衝撃波を全てのデスビーナイツに当て、打ち落とす。そこにラウが走りこみ、

「せえい！！！」

範囲攻撃スキルで全てをポリゴンへと変える。これがデスビーナイツへの対策だ。

その間にも、俺とラウで女王蜂に対して攻撃を当て続け、HPが1割を切った辺りで、

「麻痺モーション確認！引いてください！」

後ろからレナの声がかかる。それを聞いて、俺は女王蜂に背を向け全力で走り出す。間に合え——！

ギリギリで部屋の外へ脱出する。そのすぐ後にラウが駆け込んできて、その直後部屋に緑の雨が降り注いだ。

三つ、このボスは体力が一割切るごとに、部屋全体に麻痺の雨を降らせる。これはどんなに硬くても関係ないため、一気に戦列が崩されてしまうというわけだ。

そこで今回はボス戦の規則を利用した。《誰か一人が部屋の中にいればボスの体力は戻らない》ということだ。つまり全員が麻痺を食らう必要はなく、誰か一人を残してそれ以外は部屋の外に逃げてし

まっても大丈夫なのだ。そして、リオンを残して撤退してきたのだ。しかし、それにも弱点は有る。当然、中に残った人が危ないのだが、それについては問題なかった。

「ヒール！」

すぐにレナが解毒結晶を使い、リオンの麻痺を解毒。そして、全員の体力を回復し終わると、すぐに部屋の外へと戻る。

これが、レナの今回の役割だ。藍椿ではヒーラー装備と呼んでいるこれは、全く戦列に加わらず、結晶を使つての回復だけに専念する、まさにヒーラーを作る作戦だ。ワンパーティーだからこそできる作戦でもあった。

大規模パーティーでこれをやるのはまず不可能だろう。まずこのSAOには魔法というものがないため、回復は必然的にアイテム頼りになる。回復結晶は結構値が張るし、当然回復しても経験値はたまらない。そんな役割を誰が好んで引き受けようか。そんなことをしているのだったら、戦列に加わり、少しでも経験値をためた方がいいだろう。

レナがこれを引き受けてくれているのは、回復結晶をパーティー全体の資産から買っているのと、これをした時の戦利品をレナに多く渡しているためだ。

俺も含めて、藍椿のメンバーはそこまで貪欲ではない。各個人、色々な目標を持って参加しているのだが、それ以外のことについてはフレンドリーで、活動があれば大きな理由でもない限り参加する。今回のように。

「レイ君！打ちもらしたのお願い！」

「任せてくださいっ！」

いまだ沈黙していない2匹向って突撃。短剣を一閃し一匹を切り捨てると、体勢を立て直してもう一匹に止めを刺す。同時に一撃相手からももらったが、すぐにレナが回復してくれる。そろそろだな・・・。

このボスが倒れない最大の理由があり、それをどうにかしないことには勝てないのだ。

「逃げ始めたよ!!」

来たか!このボスが倒せない最大の理由、それはこの逃亡だ。体力が1割を切ると、天井まで逃げて体力を回復してしまうのだ。その前に仕留めきれないと、またさっきのやり直しになってしまう。本当は逃げ始める前に終わらせたかったんだが・・・。

「提案してなんなんですけど、これ本当にできるんですか？」

「やってみなきゃ、分からんだろ」

リオンは苦笑しながら、ぐつと鎌を構える。確かにやってみなきゃ分からないか・・・。

「そうですね、ラウ姉よろしく!」

「まっかせて!!」

俺は脇にある大樹に投剣を等間隔に突き刺していく。投剣を投擲し続け、部屋の3分の2辺りまでいった所で、

「やあああああ!」

ラウがその投剣でできた足場を駆け上っていく。投剣がラウの重さを支えきれず、抜け落ちていくが、それよりも早くラウは走り抜けていく。

そしてもう足場がなくなる辺りで、リオンが鎌を投げつける。鎌は弧を描きながら飛んでいき、ラウの最後の足場となった。それをラウは思い切り踏み抜き、跳躍した。

「せえーーーーい！」

ラウが自分の持っている最大スキルを打ち出す。真下から降りぬかれたメイスは女王蜂に命中し、

ビイイイイイイイイイイイイイイイイ！！！！

ポリゴンの欠片へと変えた。

「できちゃいましたね・・・」

終わったのを確認して、中に入ってきたレナが呆れ半分、驚き半分の顔で言ってきた。

「俺も、成功するとは思わなかったよ・・・」

その偉業を達成したラウは落ちてきたところをリオンに受け止められていた。

何はともあれ、ボス戦が終わったのだ。できるとは思っていたのだが、実際にしてしまうと妙な困惑感があった。

「さて、じゃあ目的の11層に行きますか」

リオンは階段を指しながら先に行ってしまった。ラウは後ろで何かしているようなのでリオンの後についていくと、

「うわあ・・・！」

レナが声を上げた。広がった景色は今までとはがらっと替わり、中世ローマのような街だった。

こんな広い層に自分たちしかないという優越感に浸りながらも、周りの建物に触ってみたりしていると、後ろからラウが登ってきた。

「先に行ってるね！！」

そう言つて真つ先に駆けていった。俺らもラウの後を追ったのだが、彼女は少し進んだ場所で止まっていた。

「何かあつたんですか？」

「これだよ、これこれ！」

見てみると、宝箱があつた。かなり大きな宝箱だが、たぶん罠が仕掛けられてるはずって、

「つて、いきなり開けてるんですか！？」

「そこに宝箱があるからだよ！」

時既に遅し。宝箱にかかっていたアラムトラップの所為で大量のモンスターと戦うことになったのはまた別の話だ。

E X 藍椿のボス攻略・後編（後書き）

藍椿でのボス戦、どうだったでしょうか？
感想とか待ってます！！

世界は狭い（前書き）

あけましておめでとございます！

今年も地道に更新していきますので、よろしく願います。
では、どうぞ！

世界は狭い

50層アルゲード、ここは何時見ても《猥雑》という言葉が当てはまる。人で溢れかえったこの層は現実世界での都市を思い出す。今となつてはどつちが現実かも分からなくなってきたが・・・

俺はここで人を待つていた。そろそろ待ち合わせ時間だが、いまだに待ち人が現れる様子がない。待ち合わせ場所に設定したのは、転移門から近い場所なので迷うことはないはずなのだが。

「レイトさーん、お待たせしました!」

こちらに近寄ってくる彼女は半年位前に付き合っているシリカ。俺も声を返そうとして、隣にいたプレイヤーを見て顔をしかめた。

「なぜ、お前がいる・・・?」

「なぜってやだなあ、途中であつたからですよ、先輩」

シリカの隣にいたのは元藍椿のメンバーレナだった。なるほど、レナが着いてきたから遅れたのか。

「で、なんで着いてきたんだ?」

「シリカちゃんに聞いたら、たぶん行き先同じかなと思ひまして」

今日は、少し前からシリカと話し合っていたことを実行するためにある場所に行く予定だったのだが。レナも同じ場所に用事があったのか。

この半年で、シリカとレナはかなり打ち解けていた。シリカ位の年

頃の女性プレイヤーが少ないこともあって、月に2、3度会いに行
つてる程度まで親睦を深めていた。

「それで、先輩たちは何か買いに行くんですか？」

「いや、売るだけだな」

「他にちよつと買いたい物があるので」

俺とシリカが交互に言うと、レナはへえと一言呟くと、

「婚約指輪ですか？もう二人もそこまで行ってたんですね」

「違います！！」

シリカが顔を赤くしながら反論する。だがそれ、レナには逆効果だ
ぞ？

「付き合ってもう半年ですもんね、いやーおめでたいですねあ」

「だから、違いますって！！」

そろそろ止めるか。レナには別に教えても構わないしな。

「シリカ、レナに教えてもいいか？」

「あ、いいんじゃないでしょうか。レナさんになら別に大丈夫です
し」

一応シリカに確認を取ってから、レナに俺らが買おうとしているも

のを伝ようとしたのだが、

「おっと、もう着いたか。その話はまた後でな」

「やっぱり、同じ場所でしたね」

目の前の扉を開けて店の中に入る。夜に入ったあたりなので、店の中は客で混雑していた。その中で商談をしている店主を見つけると、商談が終わった頃を見計らって話しかける。

「おつす、エギル。買い取り頼めるか？」

「お、レイトか。お前がこんな時間に来るなんて珍しいな」

「え？レイトさんって何時も何時ごろ来てるんですか？」

「へえ、レイトに連れがいるとはな。これまた珍しいこともあるもんだ」

珍しいって、まあ事実なんだけどな。いつも来るの午前2時くらいだし。

「2時ですか!？」

そんなに驚くことか？MMOなんだし、その時間帯に活動してる奴らもいなくはないと思うんだが。あれ？俺口に出してたか？

「で、そちらのかわいいお嬢さんはどちら様で？」

「シリカだ。俺のパーティで――」

「先輩の彼女さんです」

言いかけたところでレナの妨害を食らう。余計なことを……。

「レナちゃんも来てたのか」

「こんにちわです、エギルさん。私はいつもので」

エギルがレナに気づいて声をかける。それにしても、2人が知り合
いだったとは……。世界は広いようで狭いな。

「にしても、レイトにも春が来るとはなあ」

「僻みかよ？いい年して」

「残念ながら、現実には嫁さんがいるもんでな。伊達にお前らより年
食ってない」

なんか言葉の使い方が違う気がするが、エギルは嫁持ちだったのに
は少し驚いた。道理で他の奴らと視線が違うわけだ。

「いつも通り、買い取り頼むわ」

「はいはい、今回も期待してますよっと」

ちなみにまだ俺とシリカは《結婚》はしていないため、アイテム欄
は共有にはなっていない。エギルは俺が出したトレードウィンドウを
覗くと、目を丸くしてこちらを見つめてきた。

「良くこんなに貯めたな・・・全部俺のところに売り払っていいのか？」

エギルが言っているのは、俺が出した品の中に、色々な生産スキルで使うアイテムが混じっていたからだろう。一つ一つその専門の場所に持っていけば、もう少し高くなるのだろうか・・・。

「構わないさ。だったら、お得意様って事で少し高くしてくれ」

「ちよつと待ってる。これだけの量だ、それなりの値段で買わせてもらう」

エギルはそのまま俺の出した物を鑑定スキルにかけ始めた。目標達成のためにある程度高値がつくといいんだが。

「それで、先輩！何を買うんですか？」

そういえば、その話は結局話せてなかったな。

「ログハウスだ。俺ら二人のな」

「一緒に暮らせますし、色々都合がいいんで」

そう、俺らが買おうとしているのはログハウスだ。SAOでは結構高めに設定されているため、ほとんど買う人はいない。だが、一つの現実となってしまったこの世界では、個人の空間は必要なものになった。それで、シリカから提案があり、ログハウスを買おうという事になったというわけだ。毎月部屋代を払うのが面倒になったのもあるが。

「ログハウスですかー。買ったなら、私遊びに行ってもいいですか？」

「もちろんです！」

シリカとレナが話しに入ってしまったため、手持ち無沙汰になってしまった。エギルの邪魔でもするかと思っていると新しい客が入ったので、

「いらっしやいませー」

と、特に気持ちもこもってないあいさつを試みる。

俺も自分の店でもないところで、見知らぬプレイヤーにこんな真似はしないのだが、今入ってきた客は俺の顔見知りだった。

「なんだ、レイトかよ。こんなぼろい店に店員でも雇ったのかと思っただぜ」

「あのエギルがか？そんな事ありえんだろ、クロノ」

入ってきたのは黒の剣士ことキリトだった。今日は知り合いに良く会うな……。

「クロノも買い取りか？」

「ああ、珍しいのが手に入ったからな」

「へえ、トレードの時でいいから俺にも見せてくれよ」

鑑定に夢中になっていたエギルに声をかけ、キリトのトレードウィンドウを覗くと、S級のレアアイテムがそこにはあった。

「おいおい、S級のレアアイテムじゃねえか。《ラグーラビットの肉》か、俺も現物を見るのは初めてだぜ……。キリト、おめえ別に金には困ってないんだろ？自分で食おうとは思わんのか？」

「そうそう、こんな機会二度とないぜ？ラグーラビットって言うたら、アインクラッド三大珍味の一つじゃないか」

アインクラッド三大珍味とは、料理専門ギルド合同で出している本に載っている食材のことだ。俺もまだ一つしか食べたことはない。もったいないと思うのだが……。

「思ったさ。多分二度と手には入らんだろうしな……。ただなあ、こんなアイテムを扱えるほど料理スキルを上げてる奴なんてそうそう……」

そこまで言ったところでキリトの肩をつつく女性。すると、キリトはつついていた手を逆に掴み返し、振り向きざまに、

「シェフ確保」

「な……なによ」

いかぶしげな顔で後ずさる女性。てかクロノよ、それ下手したらハラスメントに引っかけかるぞ？

「お久しぶりです、アスナさん」

目の前でキリトに手を掴まれている女性は攻略組のトップギルド、血盟騎士団こと《KOB》のナンバー2のアスナだ。

SAO内でも珍しい女性プレイヤーの一人で容姿も非の打ち所がない。そこまでなら、シリカやレナもそれに該当するのだが、その上トップギルドの副団長とまで来ると、逆に知らない人の方が少ないだろう。

「あれ、レイト君も居たんだけ？」

俺にはアスナ、というかKOB自体との付き合いが少なからずある。基本的にいいギルドなのだが、少々硬いギルドでもあるかなと俺は思っている。

それにしても、いまだにアスナの手を掴んでいるキリトに対しての、アスナの護衛の視線が凄いいこと……。やっぱ人気高いなあ。

「珍しいな、アスナ。こんなゴミ溜めに顔を出すなんて」

やっと、キリトがアスナの手を離して告げる。と同時に俺も背中をつつかれる。

「ん？どうした、シリカ？」

「何でレイトさんがKOBの副団長と知り合いなんですか!？」

声をひそめて聞いてきたのだが、アスナにも聞こえてしまったようでその答えはアスナが言った。

「時々攻略の手伝いをしてもらってるのよ。それで、このかわいい女の子は誰なの？レイト君」

「俺の彼女ですって言えば信じてもらえます?」

この返しにはアスナだけでなく、キリトも驚いたようで、口をあけてこちらを見てくる。もう少し別な紹介の仕方があったか？とも思ったのだが、シリカも問題なかったようで、更に俺に腕を絡ませてくる。

「レイトさんの彼女のシリカです。よろしくお願いします」

「あ・・・シリカって半年くらい前にレイトと一緒にいた娘か！」

「その通りだ、クロノ。んで、ついでに」

「ついでってなんですか、ついでって！？私のことですよね！私はセレーナです。レナって呼んでください。それに、アスナとはもう知り合いです！」

俺の後ろからレナが勝手に出てきて自己紹介する。アスナさんと知り合いだったのか？

「あら、レナじゃない。あなたもここ来てたの？」

「はい！エギルさんのところ、安いで」

自分の店を褒められて、エギルがだらしなく顔を緩ませる。現金な奴だな・・・。

わいわい皆が盛り上がる中、俺が今日痛感したことは、世界は広いようで狭いということだった。

世界は狭い（後書き）

意外なところで意外な人が知り合っていた。
こつという体験あるんですね・・・

そのときは本当に驚きました。

今年もこの小説をよろしくお願いします！

感想とか待ってます！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2655v/>

剣の世界の銃使い

2012年1月4日23時53分発行